

第六九号



2022

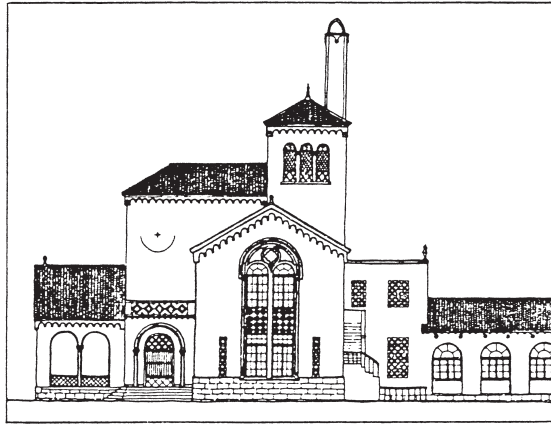
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第 六 九 号

2021年4月—2022年3月

も く じ



随想	1
「日本部」の共同研究の思い出	高木 博志
講演	5
夏期公開講座 名作再読13	5
エベネザー・ハワードの「田園都市」論と関西	守岡 知彦
「うた」と「つき」と風流夢譚	石井 美保
豊かな言語の森を俯瞰する	池田 巧
橋本萬太郎『言語類型地理論』	池田 巧
講演会ポスターギャラリー二〇二一	13
彙報	16
共同研究の話題	20
「見える」ものや「見えない」ものを表す	外村 中
東アジアの文物や芸術	岡田 暁生
田中雅一さんへの自慢話	岡田 暁生
所のうち・そと	25
私の「訂正欄」	呉 孟晋
鎌倉から鴨川へ——二つの漱石句碑	小堀 聡
トランプ VS チュワンブ	野原 将揮
誤読のユートピア	藤野 志織
接続と切断の科学史にむけて	岡澤 康浩
顔音痴な私とオンラインでの日常	楊 維公
書いたもの一覽	40

「日本部」の共同研究の思い出

高木博志

一九八〇年代なかば、私はあこがれの人文科学研究所の共同研究、飛鳥井雅道班「国民文化の成立」の末席で聞かせていただいた。立命館大学院生のときで、心躍った。

二十歳過ぎ、社会運動史の掛谷宰平ゼミの夜は、いつも飲み屋のはしごで、祇園東の「藤」というバーにも連れて行ってもらった。そこで佐々木克、飛鳥井、羽賀祥二といった人文研のスタッフとお目にかかり、それが縁で研究班に参加させていただいた（敬称略）。研究班後の飲み会も、研究会の一環であったし、ときに人事も祇園から電話がかかってきた。当時の大学や共同研究は、男性社会の側面もおもったとおもう。

日本思想・日本文化・日本社会の三分野からなる「日本部」（二〇〇〇年改組で人文部）において、飛鳥井班は「日本文化」研究を担い、林屋辰三郎の「化政文化の研究」「幕末文化の研究」「文明開化の研究」を引き継ぎ、『国民文化の研究』（筑摩書房、一九八四年）を出したところだった。明治維新から一八八五年（内閣制）までの、不在の「国民文化」を政治との関わ



りを持って描き出そうとした。当時、注目され始めた政治文化や国民国家の議論とも接点をもった。

中世史研究の林屋辰三郎が、立命館大学から人文研に移って幕末・維新期の共同研究を担ったように、「日本部」においては「近代化」が大きなテーマであった。遡るが、東大・京大では、戦前は前近代しか卒論テーマが許されなかった。井上清が一九五三年に人文研に赴任してはじめて、京都で日本近現代史研究が学問になったと岩井忠熊は回顧している。一九八四年、松尾尊兎が人文研から設置された現代史講座に移り、文学部ではじめての日本近現代史のスタッフとなった。

マルクス主義の講座派がまだまだ影響力が強かった歴史学界においては、地主制など、近世からの連続性に目がいきがちで、かつ政治史や社会経済史が研究の主流であった。それに対して飛鳥井班の近代像は、一九六〇年代からの桑原武夫のブルジョア革命の共同研究とも共振する。近代に生み出されたもの、そして深く政治とかわり暴力性をもちうる「文化」を正面に捉える共同研究は、人文研においてこそ可能であった。その文化は、美術や文学の作家・作品論に終始するものでも、きれいなものだけを見るのでもない、学の系譜があった。

飛鳥井は、文学部フランス文学を卒業し、桑原が見いだしてすぐに人文研助手になった。政治小説研究で論壇の人となり、中江兆民・幸徳秋水など思想家の研究から、次第に史料に基づく切れ味鋭い天皇制論をも展開してゆくことになる。当時は、



活字になっていない卒論・修論を読んで、人材を見出す人事も行われた。東一条の天井の高い大会議室、研究会中に椅子に公家座り、片膝を立ててあぐらをかく飛鳥井の姿が目につかぶ。

人文研の入口には、班名・報告者・タイトルが書かれた記録紙が張り出され、共同研究の象徴であった。暮れにポーナスがでると祇園の飲み屋の請求書が、総務係により教員のメールアドレスに配られた。

飛鳥井編の羽賀・小股憲明・佐々木・園田英弘・辻ミチ子・井上章一と選び抜かれた重厚な論文集をみると、共同研究の原点であると叱咤される気持ちになる。とても及ばないが、私に「職業としての共同研究」を自覚させている。

一九九八年、飛鳥井班のあとの佐々木班「明治維新期の研究」にスタッフとして加えていただいた。一九八〇年代以降、全国で膨大に近現代史料が発掘され、文書館の公開体制もとのつてきた。それとともに明治維新史においては、史料に即した多くの研究がでてきて、封建領主制の解体の徹底や、成立した国家や制度の近代性が明らかにされ、そうした学問状況を反映していた。

「日本部」では、古屋哲夫・山本有造・山室信一とつづく、日本が主語ではない「帝国」の共同研究も、大きな流れをつくった。吉田光邦・横山俊夫の万国博覧会や比較文明の研究は、国際日本文化研究センターにも影響を与えた。そして渡部徹・松尾尊発・古屋・水野直樹の社会運動史の基礎研究は、人文研



のこれからの学術資源の核をもたらしている（『人文科学研究のフロンティア 京都大学人文科学研究所要覧』二〇〇一年、参照）。

共同研究のメリットの一つは研究者との出会いにある。私の場合、佐々木班で知り合った研究者が新たに共同研究を運営する上での導き手であり、多くの発想や教示を得てきた。

「日本部」の学の系譜を、私は、史料に基づいて構築する世界のおもしろさ、そして現代の政治や社会と向き合うなかでの学問的営為にあると思っている。



講演



夏期公開講座

名作再読——いま読んだらこんなに面白い13

エベネザー・ハウードの「田園都市」論と関西

守岡知彦

エベネザー・ハウードの「田園都市」論は世界各地の都市計画に大きな影響を与えたが、日本もその例外ではない。エベネザー・ハウードは一八九八年に『Tomorrow: A Peaceful Path to Real Reform』を发表し一九〇二年に『Garden Cities of Tomorrow』

（明日の田園都市）という現在の題名で再刊したが、その翌年の一九〇三年には内務省地方局府県課長井上友一、嘱託留岡幸助、生江孝之らが最初の田園都市であるレッチワースの現地調査を行っている。この日本における初期の受容の一つである内務省地方局の官僚たちによる研究は農村改良を主要な目的としたものであり、自治の問題を重視していた。これは「田園都市」論の日本での受容が都市計画、とりわけ私鉄沿線の宅地開発であったことを思えばやや意外なことと思われるが、内務省地方局有志編纂「田園都市」において日本における「田園都市」に近い例として滋賀県東近江市五個荘が挙げられているのを知った時ふと頭の中に妄想が湧いた。それはもし京阪が名古屋急行電鉄線の建設に成功していたらどうなっていたかということである。

「田園都市」論の世界各地における受容の形はさまざまであり、鉄道を前提としない都市計画も少なくないが、日本において「田園都市」論の影響を受けた都市の多くは私鉄、より正確にいえば、二〇世紀初頭に発達した電気工学に基づく新しい鉄道システムであるインターアーバン（都市間電気鉄道）を前提にした都市圏システムとして受容された。この背景には大都市、特に大阪における深刻な大気汚染が挙げられる。つま

り、蒸気機関の煤煙とは無縁の電気を使った鉄道で空気の綺麗な郊外に住んで健康で文化的な生活を送るという体験を提供するものとして多角的な沿線開発に基づく電鉄のビジネスモデルが確立された。これは阪神や京阪などの第一世代のインターアーバン（既存の集落をなるべく多く通り都市内では路面電車区間を持つが故にカーブが多く低速であった）でも見られたが、本格化したのは阪急神戸線や新京阪鉄道（現阪急京都線）、阪和電鉄（現JR阪和線）などのハイスピードインターアーバンとも呼ばれる第二世代を迎えてからである。第二世代のインターアーバンは都市間を短時間で結ぶために人口が少ない場所になるべく直線的に線路を引いて高速運転を行うというコンセプトであったがそれゆえに開業時にはその路線人口の少なさに苦しむ宿命を背負っていた。この解決策が新興住宅地、アミューズメント施設、百貨店事業等からなる多角的な沿線開発であり、都心と郊外を結ぶ電鉄線に囲い込まれた『王国』を形成した。後に漫画・アニメ文化に大きな影響を与えることになる手塚治虫も宝塚をはじめとする阪急文化の中で育ったことを思えば、このインターアーバンを核とした日本型「田園都市」システムは人や情報が流れる文化の回路ともなったことが判るが、こうした『メディアとしての都市』という側面

もエベネザー・ハーワードの元々のアイデアに含意されていた。

ところで、前述の名古屋急行電鉄は一九二〇年代に京阪が計画していた滋賀（京都）と名古屋間を結ぶ都市間電気鉄道であり、新京阪と接続し大阪・名古屋間を二時間で結ぶことを目指していたが、大恐慌によりこの計画は実現しなかった。関西では一九三〇年代頃までに現在の私鉄網の大部分が形成されたが、この結果、滋賀県はその例外となり、現在では新快速の停車駅を中心に新興住宅地を形成しているものの、私鉄沿線に囲い込まれたニュータウンは存在せず今も車社会である。もし、名古屋急行電鉄が開業していたら、おそらく滋賀県湖東地方も大きな影響を受けていたはずで、もしかしたら関西と中部地方が一つの大きな都市圏になっていたかも知れないし、五個荘もインターアーバンの洗礼を受けて大きくその姿を変えていたかも知れないし、あるいは、そうはならなかったかも知れない。いずれにせよ、本書はありえたかも知れない都市圏を妄想するネタにもできるし、新しい技術を前提にした未来の（これからありうるかも知れない）さまざまな「明日の田園都市」を考えるヒントにもなると思った次第である。

〈うた〉と〈つき〉と風流夢譚

石井美保

〈うた〉と〈つき〉。歌と憑依はともに、人の内に潜む他性が自己を凌駕する契機をはらみ、またいずれも〈うつし〉と〈うつり〉、つまりミメシスを通じた自己の変容を伴うという共通性をもつ。〈うつし〉を通して〈うつり〉へと至る歌や憑依の意味を考えようとすると、詩歌への批評は興味深い視座を提供してくれる。

なかでも重要な批評のひとつは、桑原武夫によるものだろう。彼は戦後間もない一九四六年と一九四七年にそれぞれ、「第二芸術」と「短歌の運命」と題した評論を発表している。いずれも鷹揚な語り口で、現代日本における短詩型文学のあり方を批判し、その存在意義に疑問を呈したものだ。「第二芸術」のなかで桑原は、俳人の地位が作品そのものではなく「俗世界における地位のごときもの」によって決定されていることや、その社会的行為が「作品そのものに何の痕跡をもたない」といった俳句の性格を批判し、このよう

に大衆的である上に旧来の形式に縛られた俳句は「芸術」という名にふさわしいものではなく、「第二芸術」と呼んで他と区別すべきだと述べている。

桑原の手厳しい批判は当時の俳壇・歌壇からの激しい反撥を招いたが、いずれにしても彼の批評は、自律的な個人たるべき近代知識人としての立場からの明晰な批判であった。桑原の観点からすれば、芸術とはあくまで「個人が自己の生きる世界とのあいだの相互作用によって新しい経験を作り出すこと」であり、個人の創造性よりもジャンルとしての形式の継承を重んじる短歌や俳句などは、近代芸術とはみなしがたいものだった。

桑原の批評との比較対象として興味深いのは、「たとへば（君）、あるいは、告白、だから、というか、なので、『風流夢譚』で短歌を解毒する」という長い題をもつ金井美恵子の批評である。この文章は二〇一二年、雑誌の深沢七郎特集に掲載された。桑原の明快な批評とは対照的に、皮肉と諧謔に満ちた金井の文章は決してわかりやすいものではない。にもかかわらず、金井の随筆が発表されたときの短歌界の主だった反応は、「結局、第二芸術論のときの批判と変わらぬ」というものだったようだ。だが、よく読み比べてみるとそれぞれの批評はその論調を異にするのみならず、

論旨においても少なくない差異をもつことに気がつく。このエッセイの冒頭、金井は『風流夢譚』は短歌について書かれた小説である。では、短歌（俳句も、ついでに）とはどういうものか」と書く。そして、大手新聞における歌壇欄の活況などを挙げながら、短歌とはいわば、日本中に拡がった「巨大な共同体的言語空間」だと述べる。その一方で彼女は、ある雑誌の新聞広告にあった「(皇室の)御用掛として和歌のご指導にあたる歌人」という文句を目にして、「そうだ、短歌ではなく、あれは和歌だったのだと思いたった」と書く。「あれ」というのは、深沢の『風流夢譚』に登場する歌のことである。このように、新聞広告をみて短歌と和歌の違いにあらためて気づいたふりをしながらも、金井の批評のポイントは、(その区別をうっかり見過ごしてしまふほどの)両者の連続性にある。ところで、金井の随筆の主題である『風流夢譚』とは、どのような小説なのだろうか。一九六〇年に出版されたこの小説は、主人公である「私」のみた奇妙な夢を描いている。それは、東京都心で革命が勃発して群衆が皇居に押しかけ、皇族が辞世の歌を詠んで処刑され、お祭り騒ぎの中で主人公もまた辞世の歌を詠んでピストル自殺を図るといふ荒唐無稽なものだ。出版当時の時代背景としては、一九五九年に皇太子夫妻が

成婚し、翌年には安保闘争が起きている。六〇年の秋にこの小説が『中央公論』に掲載されるやその内容が問題視され、同誌の編集部長が宮内庁に出頭陳謝。右翼による深沢と出版社への脅迫が続き、ついには社長宅での殺傷事件に至る。

だが、このエッセイの中で金井は『風流夢譚』の惹き起こした事件については深入りしない。それよりも彼女が目にするのは、この小説の中で「私」のみた夢として描きだされる、一般大衆と皇室とをつなぐ巨大な「歌の言語空間」の存在である。

『風流夢譚』は、和歌という、「歌開始」がどうやらその頂点を占めているらしい、たとえば日本一の富士の山を思い出させる言語空間の言葉が、あれこれ飾りたてられてはいるものの、「意味」としては空疎で、じゃあ自分も、と(簡単に作れそうなので)歌を詠もうとするものは盗作者(深く記憶に染みこまれてしまっているあれやこれやの歌のせい)になる、という小説である。

この金井の言葉の意味するところは、主人公がピストル自殺を図る場面を読むと明らかになる。死を決意して「私」が詠んだ辞世の歌は、はからずも万葉の防

人の歌の引用（盗作）であった——このエピソードは、単に「私」のとほけた迂闊さを表しているだけではなく、連続と続く歌の「共同体的言語空間」の核心にかかわっているとされる。（うつし）を通して（うつり）に至る憑依にも似て、短歌や和歌では先人の歌の引用を通して歌の意味や文脈が重層化され、歌の主体もまた他性を宿して重層性を帯びる。くわえて、憑依と同じく歌もまたさまざまな表現をとりながらも、共通した型をもつことでその継承性と同一性が保たれている。

このように、歌の言語共同体の中で繰り返される引用と反復、型の踏襲を通した（私）の重層化といったことこそ、この言語共同体の核心をなすものだと思われる。またこの点こそが、新たな経験に根ざした個人の創造性と、芸術を通した近代的自己の確立を重視する桑原が批判した点でもあっただろう。

だが、「歌を詠もうとするものは盗作者になる」と金井が言うとき、彼女はそのことを批判しているのだろうか？ あるいはひよっとすると、「盗作」という言葉自体がこの場合は一種の諧謔であって、むしろあらゆるテキストは引用でしかないことを十分に承知した上で、彼女はあえて皮肉をきかせているのではないか。『風流夢譚』における「私」の辞世の歌を読みなおしてみると、それは真正なオリジナルの盗用である

というよりも、引用と反復を通した言葉の「反復」（デリダ）としてとらえられる。この小説の中で、「私」は防人の歌を引用することによって、コードを共有する歌の言語共同体に参入し、その内部で発話行為を行っている。同時に、「私」は万葉の歌を思いがけないコンテキスト（「革命」の現場）において引用することで、異質な効果を生みだしている。

ただし、そうした異化・反復の行為はオリジナルを侵害する例外的な不法行為ではなく、そもそも歌の言語共同体において絶えず繰り返され、その拡張を促してきた反復のさまざまな形態のひとつであるにすぎない。『風流夢譚』に対する一部の人びとからの激しい攻撃は、真正なオリジナルや正しいコンテキストの絶対性を疑わないような視点によるものだっただろう。だが実際のところ、『風流夢譚』が行っているのは、共有されたコードに基づく歌の引用と反復を通して、ナショナルなものと同一視される歌の言語共同体を遂行的に召喚しつつ、それを内側から攪乱する試みだった。

近代芸術なるものを、個人が全人格を賭して取り組むべき課題であり、作者自身の経験と不可分に結びついた独創性の表現とみる桑原とは異なり、金井は近代以降の短歌において、幾度もの革新を経てもなお「近

「代的主体」の確立がみられないことを批判しているわけではない。というより金井の論では、そうした主体の存在自体がそもそも想定されていないようにみえる。

あらゆる遂行的発言は引用と反復を通してさまざまなコンテキストに結びつきながら重層化していくが、そのとき発話の主体もまた、共有されたコードに従って言葉を用いし、反復する者としての集合性と代弁性を引き受けることになる。なかでも定型の中で模倣と引用を繰り返す歌の〈私〉は、呪言をのべる憑坐にも似て、一個の近代的自我によっては代替されえない重層的な他者性を深く刻印されている。

にもかかわらず、歌人と呼ばれる人びとの一部がそうした〈私〉の異他性と底知れなさに慄くよりも、むしろ共通の基盤をもつ「私たち」の親密な共同性に安んじているようにみえること。また、そのように連続と続く引用と反復を通して再生産されつづける共同性が、しばしばナショナルな共同性と重ねあわされてきたこと。そして、そうした共同体の起源や中心とされるものは、絶え間ない模倣と反復によって創りだされる仮構でしかなく、あたかも真正かつ神聖なものであるかのように想像されていること——そうしたことを、この曲がくりくねったエッセイの中で金井は、皮肉をきかせてからかっているのである。

豊穣な言語の森を俯瞰する

橋本萬太郎『言語類型地理論』

池田 巧

著者の橋本萬太郎教授（一九三二—一九八七）は、日本を代表する言語学者のひとりです。中国語諸方言の研究を基礎に、言語類型論と言語地理学を結び付けた『言語類型地理論』を提唱して、日本の言語学研究のみならず、中国の言語学界にも大きな影響を与えました。

橋本教授の理論を一般向けに、いわば総論として刊行したのが『言語類型地理論』（弘文堂、一九七八年）でした。その後、各論とも言うべき『現代博言学』（大修館書店、一九八二年）が刊行されています。『言語類型地理論』の影響は大きく、日本における中国語研究の基本参考図書として歴史学や人類学など東アジア研究の関連分野においても広く読まれました。中国でも余志鴻（訳）『語言地理類型學』（北京大學出版社、一九八五年）が出版されると学界に衝撃を与え、その直接的間接的影響のもとで橋本教授の手法をまねた数

多くの研究が現れました。のち二〇〇八年には、世界圖書出版公司より『外國語言學名著譯叢』の一冊として再刊され、歴史言語学の古典的名著として知られるアントワーヌ・メイエの『史的言語学における比較の方法』と並んで、中国では言語学徒必読の文献に位置づけられています。

橋本教授は中国語諸方言を中心とするアジアの諸言語を精密に観察し、音韻、語彙、統辞構造などの各レベルにおける特徴の類型分析を各言語の地域分布に照らし合わせると、南方ほどタイ・カダイ語的で、単音節語が多く、声調が多く、SVO型であり、北方ほどアルタイ語的で、多音節語が多く、声調が少なく、SOV型であることを指摘しました。そのうえで、中国語諸方言における南から北への類型構造の分布には、古代漢語から現代漢語への変化の諸相が反映されていることを豊富な言語史の研究成果を参照しつつ論証しました。ヨーロッパで発達した比較言語学による系統論的分析をそのままアジアの言語に適用するには限界があり、アジア大陸の諸言語は系統が異なっているという観念がひとつの連続帯を構成しているという観念を重視して、それが言語の発展の歴史を反映しているという「言語類型地理論」を提唱したのでした。橋本教授のマクロな視点は、世界最大の言語群である

シナチベット諸語の研究における基本理論として、今日も高く評価されています。

『言語類型地理論』は、中国語とはどのような言語なのかを巨視的に記述したすぐれた概説であるばかりでなく、論証においては現代言語学の扱う諸問題、そしてその分析と研究の成果が一般読者にもわかりやすく提示されています。同時に中国語を中心とした東アジアの言語がどのような歴史的発展をたどって今日見られるような地域分布を構成するに至ったのかをふまえ、中国語の成立過程を正面から論じた非常にスケールの大きな論考であり、いわばジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』の東アジア言語版といった趣の、知的刺激に満ちた読み物でもあります。ただし、刊行されたのが一九七八年ですから、今日の目からすると、もはや古典的著作として扱うべきことも事実です。橋本教授が『言語類型地理論』を執筆していた頃は、中国は文化大革命（一九六六―一九七六）の直後の時期にあたり、今日の目で見ると、その時代に利用できた資料の制約には改めて驚かざるを得ません。また本書は橋本教授の初期の執筆作品であり、のちに同書にはデータの引用に不正確なところがあるとの指摘もなされました。こうした指摘は八〇年代以降、改革開放政策のもとで、中国の学術研究も世界的なレベルへと飛

躍的な発展を遂げ、中国語諸方言をはじめとして、東アジアの大陸で話されているさまざまな言語のデータが膨大に蓄積されたことによるものです。そのなかには、橋本理論への反証を示す事例も少なくありませんでした。なお指摘された箇所については、中国語版ではきちんと改訂がなされており、『橋本萬太郎著作集』第一巻（内山書店、二〇〇〇年）に収録する「言語類型地理論」の校訂注に詳述されています。

後年、橋本先生は、新たな言語事実がつきつきと明らかになっていく時代の中で、自身が提唱した言語類型地理論の枠組みを自ら徹底的に再検証しておられました。著者自身の手で新たな展望を開くことは、病魔のために叶いませんでしたが、『言語類型地理論』の刊行後に書かれた中国語と東アジアの言語に関する一般向けの文章が二編あり、その挑戦的な姿勢が貫かれていることを知ることができます。橋本萬太郎（編）『民族の世界史五 漢民族と中国社会』（山川出版社、一九八三年）「第二章 ことばと民族」および亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典 第二巻 世界言語編（中）』（三省堂、一九八九年）の「中国語」の項目をぜひ併せてご参照ください。特に後者は、辞典の項目とはいえ、中国語という言語の特色について類型地理論的視点で書かれた簡にして要を得た概述で

あり、他の百科事典や言語学辞典の中国語の項目とは一線を画すユニークな文章となっています。

それでは、資料的制約の大きかった時代に立論された『言語類型地理論』の今日的意義とは何でしょうか？ データの蓄積により学問的知見が書き換えられようとも変わることはない理論的展望を示し得たということが最大の貢献であったと考えられます。そして立論にあたって示された数々の研究課題は、今日でも普遍的な問題群であって、個別の研究の前提となる問いかけのヒントがすでにそこに書かれている、ということが本書の価値を古典としてのレベルに高めているように思います。ひとつだけ、例をあげると、橋本教授は言語の歴史的発展を理解するための作業仮説として、牧畜「通商」民型と農耕民型のふたつの発展モデルを提唱しました。執筆当時の研究成果に基づいて、前者はヨーロッパの諸言語を、後者はアジアの諸言語を念頭に置いて立論されたものですが、橋本教授の逝去後の九〇年代以降に研究がすすんだ『民族走廊地区』と呼ばれる西北～西南中国の農牧境界帯や、ヒマラヤの諸言語に見られる複雑な言語の分布と構造の地理的推移の諸相を探究するにあたって、この作業仮説の有効性が再び注目されており、その慧眼には改めて敬服させられます。

第17回京都大学人文科学研究所
TOKYO漢籍EMANAR

デジタル漢籍の誕生
デジタル時代の漢籍の楽しみ方
漢籍から語らへ、漢籍から文化へ

2022年3月7日(月)18:00
会場 総合学術センター 講義室202
京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町
TEL: 075-753-4111 E-mail: emanar@kyoto-u.ac.jp

三月

2021 KYOTO LECTURES
Wednesday, January 26th, 18:00h

M.W. Shores
Rakugo as Variety
& Rakugo as Literature

Dr. M.W. Shores is a scholar of Japanese language and culture, with a focus on the traditional oral art of rakugo. He has published several books and articles on the subject, including 'Rakugo: The Art of the Japanese Storyteller' and 'Rakugo as Literature: A Study of the Works of Uemura Ryōmei'.

京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町
TEL: 075-753-4111 E-mail: emanar@kyoto-u.ac.jp

一月

2021 KYOTO LECTURES
Monday, January 12 (Sat), 18:00-19:30

江戸市民の暴乱
平野寛弥『江戸市民の暴乱』を読む

京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町
TEL: 075-753-4111 E-mail: emanar@kyoto-u.ac.jp

2021 KYOTO LECTURES
Friday, March 18th, 18:00h

Stephen Roddy
Urbane Waters
The Worldliness of Gion, ca. 1825

Dr. Stephen Roddy is a scholar of Japanese history and culture, with a focus on the city of Gion. He has published several books and articles on the subject, including 'Urbane Waters: The Worldliness of Gion, ca. 1825'.

京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町
TEL: 075-753-4111 E-mail: emanar@kyoto-u.ac.jp

2021 KYOTO LECTURES
Monday, February 14th, 18:00h

Giorgio Fabio Colombo
Law, Justice, and International Relations at the Dawn of the Meiji Restoration
The 'Maria Luz' Incident

Dr. Giorgio Fabio Colombo is a scholar of international law and history, with a focus on the Meiji Restoration. He has published several books and articles on the subject, including 'Law, Justice, and International Relations at the Dawn of the Meiji Restoration: The "Maria Luz" Incident'.

京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町
TEL: 075-753-4111 E-mail: emanar@kyoto-u.ac.jp

二月

2021 KYOTO LECTURES
Wednesday, December 15th, 18:00 JST

Laura Moretti
The Circulation of Playful Energy in Early Modern Japanese Popular Culture

Dr. Laura Moretti is a scholar of Japanese history and culture, with a focus on early modern Japanese popular culture. She has published several books and articles on the subject, including 'The Circulation of Playful Energy in Early Modern Japanese Popular Culture'.

京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都府京都市左京区吉野本町
TEL: 075-753-4111 E-mail: emanar@kyoto-u.ac.jp

京都大学人文科学研究所主催
2021年12月18日・19日

生誕200周年企画
《時間-生》芸術の研究
-ボードレールとその受容-

彙報 (二〇二二年四月より二〇二二年三月まで)

おくりもの

- 。岡田暁生教授は第二十回小林秀雄賞を受賞(二〇二二年十月八日)
- 。石川禎浩教授は第三回アジア・太平洋賞 特別賞を受賞(二〇二二年十一月十九日)
- 。岡田暁生教授は第四十回京都府文化賞 功労賞を受賞(二〇二二年二月一日)
- 。石川禎浩教授は第二五回司馬遼太郎賞を受賞(二〇二二年二月十二日)

訃報

- 。中村賢二郎名誉教授(九六歳)は、九月七日逝去。
- 。富永茂樹名誉教授(七一歳)は、十二月八日逝去。
- 。森時彦名誉教授(七四歳)は、三月二十九日逝去。

人のうごき

- 。稲葉穰教授(東方正学研究部)を当研究

- 所長に併任(二〇二二年四月一日〜二〇二三年三月三十一日)
- 。岩城卓二教授(人文学研究部)を副所長に併任(二〇二二年四月一日〜二〇二三年三月三十一日)
- 。池田巧教授(東方正学研究部)を副所長に併任(二〇二二年四月一日〜二〇二三年三月三十一日)
- 。池田巧教授(東方正学研究部)を附属東アジア人文学情報学センター長に併任(二〇二二年四月一日〜二〇二二年三月三十一日)
- 。石川禎浩教授(東方正学研究部)を附属現代中国研究センター長に併任(二〇二二年四月一日〜二〇二二年三月三十一日)
- 。古勝隆一准教授は、教授(東方正学研究部)に昇任(二〇二二年四月一日付)。
- 。古松崇志准教授は、教授(東方正学研究部)に昇任(二〇二二年四月一日付)。
- 。小堀聡は、准教授(人文学研究部)に採用(二〇二二年四月一日付)。

- 。野原将揮は、准教授(東方正学研究部)に採用(二〇二二年四月一日付)。
- 。吳孟晋は、准教授(東方正学研究部)に採用(二〇二二年四月一日付)。
- 。藤野志織は、助教(人文学研究部)に採用(二〇二二年四月一日付)。
- 。森下章司は、客員教授(文化研究創成研究部門、二〇二二年四月一日〜二〇二二年三月三十一日)。
- 。NOGUEIRA RAMOS, Martin は、客員准教授(文化研究創成研究部門、二〇二二年四月一日〜二〇二二年三月三十一日)。
- 。VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、特任教授(二〇二二年四月一日〜二〇二二年三月三十一日)。
- 。岡澤康浩は、助教(人文学研究部)に採用(二〇二二年五月一日付)。
- 。楊維公は、助教(東方正学研究部)に採用(二〇二二年九月一日付)。
- 。藤井俊之助教(東方正学研究部)は、任期満了により退職(二〇二二年十月三十一日付)。
- 。梶浦晋助手(東方正学研究部)は、定年により退職(二〇二二年三月三十一日)

付)。

招へい研究者

。平野 克弥 UCL A 歴史学部准教授
人種主義の環太平洋的形成…なぜアイ
ヌはインディアンと比較されたか？
(文化生成研究客員部門)

受入教員 竹沢教授

期間 二〇二一年九月一日～二〇二一
年十二月二十五日

招へい外国人学者

。MARCEAU, Lawrence Edward イ
タリア東方学研究所客員研究員
近世日本における『イソップ寓話集』
の受容

受入教員 稲葉教授

期間 二〇二〇年十二月十八日～二〇
二一年十二月十七日

。MARQUET, Christoph Michel フラ
ンス国立極東学院院长
民画の東西比較研究

受入教員 稲葉教授

期間 二〇二一年六月二八日～二〇二
一年九月五日

。HUBBARD, James Bert スミス大学
教授
中国・日本仏教文献／仏教と脳科学に
関する研究

受入教員 Witiern 教授

期間 二〇二一年十月一日～二〇二二
年九月三十日

。Djojicardan 青海民族大学准教授
日本におけるチベット学と西域研究の
展開—宗教哲学と仏教文化を中心に—

受入教員 池田教授

期間 二〇二二年二月十日～二〇二二
年七月三十一日

。ORIAN, Rebecca Chiyoko メイヌ
ーズ大学講師／准教授
The Transnational World of Japa
nese Popular Culture

受入教員 竹沢教授

期間 二〇二二年三月八日～二〇二二
年三月十九日

外国人共同研究者

。頼 霏澄 台湾大学文学院中国文学系
博士候選人

晚明清初における僧詩選集の研究

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年十一月十六日～二〇
二一年十二月三十一日

。余 柯君 復旦大学博士後
金剛智、善無畏梵漢对音譜と漢語中古
音の研究

受入教員 永田准教授

期間 二〇二〇年十一月二四日～二〇
二一年十一月二三日

。易 丹韵 早稲田大学大学院文学研究
科博士後期課程
仏教宇宙観の中国的展開に関する研究
—五～十三世紀の「世界図」制作を
手掛かりに—

受入教員 倉本准教授

期間 二〇二一年五月六日～二〇二三
年五月五日

研究生

。石垣 章子
漢訳仏典として位置付けられた疑偽経
典の成立と思想の系譜

受入教員 船山教授

期間 二〇一八年四月一日～二〇二三

年三月三十一日

外国人研究者

。趙 芙蝶

人文科学とデジタル デジタル人文ブ
ロジェクトユーザー指向のデザイン

受入教員 Wittern 教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二一
年九月三十日

。Qianqing Huang

一九二〇年代、三〇年代の日本におけ
る被差別部落

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一九年十月一日～二〇二一
年九月三十日

。王 含元

中国北方青銅器文化の社会変動

受入教員 岡村教授

期間 二〇二一年一月一日～二〇二一
年十二月三十一日

。肖 文遠

日中比較の視点からみた曆書時間の近
代化

受入教員 村上准教授

期間 二〇二一年一月一日～二〇二一

年十二月三十一日

。Pelayo Prieto, Miguel Angel

和食前の日本料理。中世・近世日本料
理への新しいアプローチ。

受入教員 藤原准教授

期間 二〇二一年四月一日～二〇二三
年三月三十一日

。陳 佩瑜

中国清末・民国における「国体」の概
念

受入教員 永田准教授

期間 二〇二一年十月一日～二〇二二
年三月三十一日

。梁 灝

劉智『天方典禮擇要解』の中の文化交
渉―朱子学との関連に着目して―

受入教員 中西准教授

期間 二〇二一年十月一日～二〇二二
年三月三十一日

東アジア人文情報学センター講習会

。二〇二一年度漢籍担当職員講習会（初
級）

第一日（十月四日）
開講挨拶・オリエンテーション

池田 巧

永田 知之

福谷 彬

第二日（十月五日）

工具書について 高井 たかね

漢籍関連サイトの利用

Wittern, Christian

実習を始めるにあたって 梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月六日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習（一）

第四日（十月七日）

和刻本について

（大学院文学研究科教授）

宇佐美 文理

漢籍データ入力実習（二）

第五日（十月八日）

朝鮮本について 矢木 毅

実習解説 福谷 彬

情報交換 安岡 孝一

終了挨拶 池田 巧

。二〇二一年度漢籍担当職員講習会（中

級)

第一日(十一月八日)

開講挨拶・オリエンテーション

池田 巧

経部について

古勝 隆一

叢書部について

藤井 律之

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日(十一月九日)

史部について

古松 崇志

漢籍データ入力実習(一)

第三日(十一月十日)

子部について

稲本 泰生

漢籍データ入力実習(二)

第四日(十一月十一日)

集部について

(大学院人間・環境学研究科教授)

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習(三)

第五日(十一月十二日)

漢籍と情報処理 Wintern, Christian

実習解説

福谷 彬

情報交換

安岡 孝一

終了挨拶

池田 巧

「見える」ものや「見えない」ものを表す東アジアの文物や芸術

外村 中

京都大学人文科学研究所が取り組んでいる人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点における共同研究の一つとして、二〇一九年四月から、稲本教授とともに、筆者（ドイツ・ヴュルツブルク大学漢学系）が運営させていたできてきたのが、少し長い名称であるから、あるいは班員でもその公式名をちゃんといえる人は少ないかもしれない《「見えるもの」や「見えないもの」》に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究《班（略称「見える見えない」班）》である。当初の予定では、様々な分野の研究者が一堂に会し、班名に関わるかどうかにはとらわれず（すなわち関係がないという関係があるという理屈もあえて認める）専門分野の枠組みを超えた座談を、心の中では炎が燃え上がっても、外見上はどんなことがあってもいたってクールに、おこなうつもりであった。そして、「対面」という言葉を口にする人などいまだいなかった頃に、こ

の班の研究会は順調に始まった、と思われた。ところが、初年度終わりに突然コロナ禍に見舞われ、それ以来ずっと、他の共同研究班と同様に、悪戦苦闘しながら、この班はついに三年間の研究期間の終了を迎えることになった。このたび、如何なる研究をおこなってきたのか記すようにとの要請が、筆者にあった。けれども、班員によるすぐれた研究の成果をそうやすやすと漏らすわけにはいかない。報告書の完成まで待つてほしい。けれども、そうはいつでも、所報『人文』の広報委員はまじめな人だから、けっして見逃してはくれない。そこで、この班による研究会における座談の内容のほんの一例を大雑把に紹介することをもって、無作法にも京都のお茶を濁らすことをお許しいただこうと思う。

それで、以下に記すところは（正確には以上にすでに記したところも）、すべては真実ではない、とかいえば、多くの人達から、それでは、おまえはうそつきかと問いただされるかもしれない。けれども、「見えるものや「見えない」ものを真剣に考察するために読んでおいた方がよい（と思われる）『金剛般若経』』という仏典が説くところに素直にしたがえば、以上のようにいふしかないといつても、決してうそにはならない。実は『老子』が説くところも案外同じであるよ

うにも思われたりする。このような点を前提にして、この班は、「見える」ものや「見えない」ものについて真摯に検討してきた。これは真実うそではない、といっても信じてくれる人はいないかもしれない。

さて、我々のような人間にとつて、「見える」ものとは、たとえば道家系によれば「有なる」ものとされるが、一方、仏教では「有なる」ものでも「無なる」ものでもなく「空なる」ものとされる。したがって、道家系が説く「見える」ものと仏教が説く「見える」ものとは、そもそも定義から異なるものということになる。それゆえ、それぞれが説く「見える」ものについての様々な情報を比較分析する時には、相当の注意が必要になる。

また、「見えない」ものとしては、いずれも同じようなものと思われる「真空」、「虚空」、「虚無」が古くから知られている。あるいはアリストテレスが早くに否定したためか、西洋では「真空」の思想はなかなか展開しなかつたらしい。一方、インドの仏教では、共通暦紀元後二世紀前半頃から「虚空」とブッダ（正確にはその身体）との関係が、中国の古代思想においては、すでに前二世紀頃以前から「虚無」と「道」（正確には「常道」と「一なる」もの）との関係が大いに議論され始めたようである。また「虚空」に充満する

ものとしてブッダの「法身（いわば真理としての身体）」が、「虚無」に集まるものとして「道」が時に想定されたりしたらしい。そして、「法身」や「道」がはたしてまったく「見えない」ものなのかどうか様々な議論が展開した。「法身」は、衆生にはまったく「見えない」ものであるが、菩薩にはおぼろげながら「見える」もので、ブッダには完璧に「見える」ものとする説などが後四世紀以降に登場し、それにとまぬい仏教美術が大いに展開した。一方、「道」は、一貫して「見えない」ものとされたが、後二世紀後半には道家系と儒家系とで解釈が分かれ理論が複雑化した。とくに「一なる」もの（すなわち「太極」）は、道家系では「道」と、儒家系では「気」とされるようになった。そして、両者の理論は、時は下って十三世紀に、日本の伊勢神道に採用され、天神六代九神は「一なる」ものとされた。この伊勢神道が説く「一なる」ものは、儒家系が説く「道」に相当するものによつて発現された道家系が説く「道」に相当するものともとらえられる。

少し長くなつたが、「見える見えない」班では、たとえば以上のようなわかりにくい話を、辛抱しながら本当かどうか検証しつつ、その結果は班員それぞれが心の内に秘めたまま、以上にまつわる文物（考古）や

芸術（美術）について、国際的な議論の準備も意識しながら、音楽器や油っこい食品に至るまで可能な限り学際的な研究をおこなってきた。報告書はいつたい如何なるものになるのであろう。

田中雅一さんへの自慢話

岡田 暁 生

人文研に来て二〇年近くなるが、私の専門と真ん中、すなわち「音楽」で共同研究をすることは、これまで避けてきた。「音楽そのもの」ではなく、「音楽の周辺」でなんとか他分野とのチャンネルを確保してきた。そもそも「音楽そのもの」を研究するには、「音楽という言語」に通暁している必要がある。そうなる研究者ではなく音楽家の方がはるかに深い議論が出来る。だから私はこれまで「音楽そのもの」の議論は大学アカデミズムの外でやることを原則にしてきた。

考え方を少し変えるきっかけになったのは、田中雅一さんから彼の退職直前に言われた、「岡田さん、君

も停年の前に一回くらい『音楽』で研究会したほうがいいよ、第一次大戦とかそういう音楽の周辺みたいな話だけじゃなくてさ」という言葉である。田中さんいわく、「人文研に音楽研究者がいたという痕跡を君も残しておいた方がいい」と。

以前から交流のあった作曲家の三輪真弘氏と共同研究をやるうという話が持ち上がったのは、ほぼ同時であったと思う。三輪氏は日本を代表する現代音楽の作曲家であり、メディア・テクノロジと音楽のかかわりを問う作品の数々にいつも強烈な印象を受けていた。数々の音楽賞以外に、著書『音楽芸術 全思考一九九八—二〇一〇』は芸術選奨を受賞している。何度か人文研の研究班で話をしてもらってもいたし、とりわけ山室信一編『人文学宣言』（ナカニシヤ）に寄稿してもらった論考は、音楽を主題に研究班を立ち上げるなら、班長は三輪氏以外にはありえないと確信させるものであった。

「私の人文学宣言」と題された三輪氏の論考で、特に印象的な一節を引用しておく。「自然学によって得られた知見を実世界において展開する『技術』を広く工学と呼ぶなら、人文学においてもそれに対応する『工学』があっても良い、いや、今こそそれが必要とされているのだと考えるのは突飛なことだろうか？

人文学における様々な知見を展開し、いま、この世界で『やって』みせていないというのが人文学研究の本当の問題なのではないか。——ここまで言われて人文学側の人間として受けて立たないわけにはいかないだろう。

三輪班の最大の目標は、ポストヒューマンが喧伝される時代におけるヒューマニティズ＝人文学／人間性の存立について、アート実践に関わる人々が人文学の先端知見に触れる場を作り、それを触媒として「人文学」としての作品を作ってもらうことにあった。論文ではなく「作品」を通じた人文学発信である。メンバーは思想史や科学史や人類学など人文学側、実験科学者やシステム・エンジニア、そして映像作家やメディアアーティストなど。近代が信奉してきた「人間」がもはやテクノロジー・システムへ部品として組み込まれ、「主体性」など持ちえないという状況の中で、「人間にしか出来ないこと」の最後の砦は何か、それともそんなものはやらないのか——これが研究会の焦点だ。

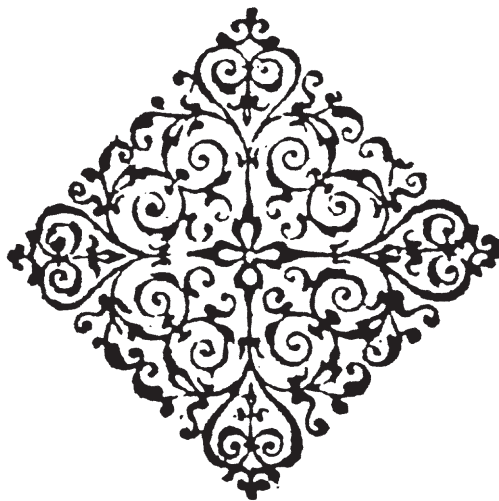
コロナ禍が起きたのはまさに、研究会がそろそろ軌道にのつてきた初年度＝二〇一九年度の終わりであった。机上の学問ではなく「作品を通して現実社会に働きかけること」を目標としたわれわれにとつて、しか

も「集うことなくして人間は人間たりうるか」という、研究班の議論のど真ん中のような事態が本場に起きてしまった以上、否応なしに覚悟の如何が問われる状況が出現したわけだ。本来二〇二〇年九月に岐阜のサラマンカホールで二日にわたつて行われる予定だった三輪氏の演奏会を、急遽「集えない」ということを主題にするオンライン配信に切り替え、研究班の成果を問う機会とする決定は、三輪氏によつてすでに三月末になされた。それから何度も研究会を催し、コンセプトについてメンバーで話し合った。

オンラインイベントの概要については、「ぎふ未来音楽展二〇二〇 三輪眞弘祭―清められた夜―」で検索すれば、大量の情報がヒットする。イベントは九月一九日の深夜二時から翌二時にかけて配信された。ライブ配信のみである。ただし一部のみ現在も公開されているので、是非ご覧いただきたい。このイベントは大変な反響を呼んだ。当日リアルタイムのみの中継であったが、視聴回数は三一五六、全体の五%が海外からの視聴、特設ウェブサイトのページビュー数は九八一九回。朝日新聞二月一七日「二〇二〇年の回顧」欄（音楽）において「今年の三点」に選ばれ、さらには『佐治敬三賞』および『サントリー音楽賞』をダブル受賞するという快挙を成し遂げた。どちらも今

の日本で最も権威ある音楽賞である。しかもこのオンラインイベントは人文研と共催であったから、人文研がダブル受賞したといって過言ではない。

— こんな風に書くといかにも自慢しているように聴こえよう。実際私は自慢している。ほかならぬ田中雅一さんに対して。よく考えればこの研究班の最大の恩人は雅一さんだったのかもしれないのだから。



私の「訂正欄」

呉 孟 晋

スマートフォン全盛のご時世にいまや少数派かもしれないが、朝起きてまず目にする文字といえは、刷りたての新聞の記事である。一面アタマから後ろの社会面までざっと見出しを拾ってゆくなかで、思わず読んでしまうのは「訂正して、おわびします」ではじまる訂正欄——。どんな経緯で誤報や誤字が出たのかまで記しているのは反省文のようであり、読んでも楽しいものではない。たいていの記事は自分が読んでいても気がつかなかったもので、わざわざ晒さなくてもよいのではと思ってしまう。それでも読んでしまうのは、ほかでもない、かつて自分も同業者であったからである。かつて「就職氷河期」といわれた二十年前、修士課程まで社会に出る猶予期間を延ばして、なんとか得た職が経済紙の記者であった。絵をみるのが好きなので、いずれ文化部の美術記者になりたいと思っていたのは甘い考えで、証券部で東京証券取引所のある兜町を駆け回る日々。若気の至りで一年半で退職したが、

いまでも忘れられないのが「名数は絶対に間違えるな」という先輩記者の教えである。

「名数」とは名前と数字のことで、「ファクト(事実)」が生命線の経済紙にあつて、これらを間違えば、市場に巨額の損失をもたらしてしまうかもしれない。新人記者が出稿した記事は先輩記者、キャップ(現場の取りまとめ役の記者)、デスク(部内の編集担当の責任者)、そして校閲部が確認していった。もちろん、書いた本人もゲラ刷りから紙面が組み上るごとに読み返して確認するのだが、かならず画面上ではなく紙に印刷して、赤鉛筆を片手に取材メモや資料と突き合わせて語句や数値が間違っていないか、一つひとつに印をつけるように指導された。新聞記事の「鮮度」は半日程度。たとえ朝刊で特ダネを報じたとしても、夕刊で他紙が追隨してくる。それでも、活字になるとはどのように手間と労力がかかることなのである。

幸いにも記者在職中に誤報や誤字を出した記憶はない。新人記者が書くことなどたかがしれているし、在職期間が短かったこともあるのだろう。それでも、何度、この誤りを出さないための仕組みに助けられたことだろうか。

退職後は博士課程に復学し、五年たったところで、幸運にも博物館に職を得た。京都で十二年、中国絵画

の学芸員として過ごしたところで、今度は人文科学研究所に籍をおくことになった次第である。二度も職を変えとは思ってもみなかったが、記者と学芸員、そして教員に共通するのは文章を書きつづけて、自らの思いを伝えることであろう。それは裏を返せば、いつまでも誤字の恐怖と隣り合わせのことなのである。

学芸員の自分は、さまざまな作品をあつめて、それらをわかりやすく展示して自らの考えを披露することにある。その表舞台が自ら企画した展覧会になるのだが、この展覧会図録がまた、誤字がないものが珍しいくらいに誤字に悩まされたものである。図録に挟まっている正誤表の紙片をみるたびに気が重くなったものだ。

展覧会が無事に開幕を迎えるまでに、学芸員は企画立案からはじまり、出品交渉や借用手続き、美術品輸送業者や会場設営業者との打ち合わせ、広報宣伝の立ち合いなどといったさまざまな業務をこなしてゆかなければならない。いきおい、原稿執筆は後回しになってしまう。みづかる誤字といえは、たいていは落ち着いて確認すれば気がつくものばかりである。

たとえば、王羲之の「蘭亭序」の一節にある「茂林修竹」を「茂林修林」とし、「林」と「竹」を取り違えてしまったのは穴があつたら入りたいくらいに恥ず

かしい誤字である。これは館内のデータベースに入力されていた作品の積文をそのまま流用したためだった。もちろん、展覧会は学芸員ひとりではできないものではなく、館内の同僚や共催者である新聞社や放送局の担当者、ときに専門の校正者にも確認してもらうこともある。それでも誤字が出るのはひとえに自らの力不足であり、いつも気ぜわしくしているからであろう。

それでは、勉学に励むのに理想的な環境である人文研に移ってきてからはどうか。誤字から解放されたかという点、残念ながらそうはならなかった。最近、恩師の論文集に寄稿した論考で、またしても誤字を出してしまったのだ。編者の先生方のおかげでいくつかは直してもらったのだが、それでも引用文での助詞の誤字、注釈につけた人名の誤記とつづけば、さすがに恩師に顔向けができない。落ち着いて取り組むべき論文も新聞や図録のように締め切りに追われて気ぜわしく書いてしまったと反省しきり。つまるところ、いつまでも自分の文章は、つかの間の言説をいう「エフェメラル」であつたのだろう。やはり、悠久なる歴史の蓄積である人文知に向き合つて言葉を紡いでゆかねばならない者としては不誠実な姿勢である。

実をいえば、これらの間違いに気がついたのでしたのは所内

の研究班でのこと。関連する内容での発表にさいして講評担当の先生に指摘してもらったのである。これは忌憚なく批判的な議論ができる研究班の効用として、声を大にして強調したいところである。自らの非力はまわりの力添えをいっただいて補うしかない。ウェブ空間で膨大な量の文字が日々消費されてゆく今日だからこそ、研究班という場において、ときに時流から距離をおいて仲間うちで熟考することも必要ではないだろうか。

不穏な言説がゆきかう最近の情勢にとまどいつつも、この「訂正欄」が連載されないよう、ここで閉じることにしたい。

鎌倉から鴨川へ

——二つの漱石句碑

小堀 聡

数十年ぶりに自転車で大学を歩き来するようになって、もう一年になる。洛外から洛外まで、片道四〇分。これだけ走らせると、道すがら発見も少なくなる。も

っとも、その多くは居酒屋（なので見つけても入れない）だったりするのだが、たまには石碑に気付いたりもする。

木屋町に宿をとりて川向の御多佳さんに
春の川を 隔て、 男女哉 漱石

御池通南側の鴨川西畔に建つ、夏目漱石の一句である。最後の京都滞在となった一九一五年春、祇園のお茶屋「大友」の女将・磯田多佳に、鴨川対岸の「北の大嘉」からこれを贈った。北の大嘉は戦時中の強制疎開で御池通に吸収されたが、漱石生誕百年の六七年、代わりにこの句碑が除幕されたのである。

雨の四月九日に行なわれた除幕式は、それなりの話題となり、翌日の朝刊で報じられた。だが、そこには些か不思議な記述がある。「発起人の鎌倉市二階堂、北里大学教授、内田貢さんら文豪をしのぶ人らが集り除幕式を挙げた…（略）…『吾輩は猫…』のおもしろさに魅せられたという鎌倉円覚寺の塔頭・帰源院の富沢珪堂住職が禅式のお清め」（『朝日』京都版）。うーむ、『猫』ファンとはいえ、なぜわざわざ鎌倉から…。話は一九六二年二月二五日に遡る。この日、北鎌倉円覚寺内の帰源院では、月刊誌『鎌倉市民』の愛読者

会が開催されていた。『鎌倉市民』は鎌倉の名士団体・鎌倉三日会が「市民の話し合いの広場」を目指して六〇年一月に発刊した月刊誌であるが、諸事情により六一年六月に独立。三日会で発刊・編集を主導した原実の個人雑誌となっていた。のち『鎌倉市民』は七八年一月の二〇四号まで続き、古都保存法制定のきっかけを作るなど、日本の自然保護・景観保全に大きな足跡を残すことになるのだが、それを原はまだ知らない。独立間もない原の念頭にあったのは、何よりも先ず雑誌を続けること。そのための定期購読者づくりであった。そこで、「愛読者はふやす努力とともにその読者をかためる努力も必要」（『編集室』『鎌倉市民』一九六二年二月）との考えから、愛読者会を思いつく。

会場の帰源院は、かつて漱石が二八歳で参禅し、『門』でも一窓庵として登場する寺院のモデルであった。編集同人の内田朝子は「その頃の住持はもういらつしやらないだらうし、建物も変つてゐるかもしれない。何か記念のものがあるか如何か」（『漱石の寺』『鎌倉市民』一九六二年四月）くらいの軽い気持で参加した。が、そこで彼女たちは思わぬ事実を住職から聞かされる。住職の富沢珪堂、つまり先の記事に登場する『猫』ファンは、漱石との交流があったのだ。珪

堂はかつて神戸で雲水だった頃、漱石にファンレターを送り、ついには一九一六年一〇月、早稲田の漱石邸に一週間宿泊したのである。妻の鏡子から帝劇や歌舞伎座の案内をうけ、師弟の集まり「木曜会」にも出席した。漱石死去の僅か二か月前のことである。そして一年後の二七年、珪堂は帰源院住職となり、ここに漱石が止宿していたことを初めて知る。珪堂は『わが仏道をひらき、わが終る所』を得た（『鎌倉漱石の会』『夏目漱石と帰源院』）と感じ、漱石命日の一二月九日には必ず読経を行なうようになった。

この因縁は、参加者に大きな感銘を与える。気をよくした原は、一九六二年五月三日、今度は「漱石を聴く会」を帰源院で開催した。集まった三〇人は改めて珪堂の話聞き、漱石の書簡や初版本を眺めた。夏目鏡子もわざわざ、関連のスライドを寄せている。参加者は再び感じ入り、帰源院に漱石の句碑を建てることとその場で決定。朝子の夫で独文学者の内田貢を代表とする鎌倉漱石の会を結成し、募金活動を始める。目標額の倍以上の四一万円（当時の国家公務員総合職の初任給は一・六万円）が三二〇人から寄せられ、石材には二・五トンの北山石が、洛西・梅ヶ畑からはるばる運ばれた。刻まれた句は、「仏性は白き桔梗にこそあらめ」。鴨川の句が挨拶なのに対し、鎌倉の句は漱

石なりの「悟り」であろうか。除幕式は六二年の命日に開催され、参列者は一七〇人を数えた。ちなみに除幕は、当時一二歳の夏目房之介氏らが行なっている（『神奈川新聞』六二年二月一〇日）。

この盛り上がりを受けて、鎌倉漱石の会は、会合を定例化するとともに、漱石記念館の建設を目標に掲げた。が、記念館は頓挫。何らかの永久的記念物を、没後五十年・生誕百年が重なる一九六六―六七年に建てる構想に変更する。

そう、鴨川の句碑は「北の大嘉」だけではなく、記念館の代わりでもあったのだ。一九六五年一二月の鎌倉漱石の会では、一〇〇人以上が出席するなか、内田貢が京都での句碑建立計画を発表した。同日は、漱石を最後の京都旅行に誘った画家・津田清楓も思い出を語っている。以後、高山義三前京都市長ら京都側の関係者も交えた発起人会が組織され、内田も度々京都に赴いた。募金の呼びかけ、用地を所有する市公園課との折衝、石材の入手交渉などが進められていく。石材は内田のこだわりにより、比叡山を模した八瀬の真黒石が選ばれた。八瀬童子会が所有していたものである（京都漱石の会『虞美人草』二二）。なぜ八瀬の真黒石なのか。その理由は不明だが、漱石最初の新聞連載小説『虞美人草』冒頭の比叡登山と八瀬の光景が、念頭に

あったのかもしれない。つまり、漱石の出立と晩年とを同時に物語る趣向としての句碑。その後、いくつもの紆余曲折を経つつも、除幕式に至る。

『鎌倉市民』を練りつつ感じるのは、短期間での建立を実現させた熱気であり、その背景である。余暇の増加や市民運動の興隆、鎌倉―京都の迅速なやり取りを可能にする交通・通信の発達といった、高度成長ならではの变化。一方で、夏目鏡子・津田清楓ら漱石関係者の存命と、その話に心を動かされる聴衆の「教養主義」という戦前からの連続。この変化と連続とがともに揃ったタイミングだからこそ、二つの句碑は建ちえたといえよう。鎌倉の桔梗も、春の鴨川も、漱石の俳味のみならず一九六〇年代という時代の一面を、私たちに遺したのである。

トランプ VS チュワンプ

野原将揮

二〇一六年アメリカ合衆国大統領選挙終盤、クリン

トシ氏とトランプ氏の両候補は激しい選挙戦を繰り広げ、両陣営の動向は日本においても連日報道されていた。大方の予想を裏切りトランプ氏が第四五代大統領に選出されたことは周知のとおりである。私はその直前までミシガン大学に留学していたため、なんとなく選挙の動向に注目していたのだが、ある時、洋を隔てたこのアジアにおいて大統領選挙と関連して別の「争い」が起きていることに気がついた。中国語圏におけるトランプ氏の表記と音声をめぐる「争い」である。

「Trump」という外来語を表す場合、日本語では原音をできる限り忠実に実現することよりも、「日本語は子音連続と音節末子音（閉鎖音）を許さない」という制約が優先されるため（ここでは「r」と末子音p）、それぞれ母音を挿入して、三音節四モーラで「torampu（トランプ）」のように発音する。日本語のルールに従順に従ったいわば「謙虚で健気なアウトプット」である。中国語の普通話も基本的に子音連続や音節末子音（閉鎖音）を許さないため、日本語と同様に母音を挿入して三音節で「telangpu（特朗普）」と発音する。これも中国語のルールに則った「謙虚で健気なアウトプット」である。以上が従来の表記方法である。

前任校では法律と政治の二学科からなる法学部に所属していたこともあり、またアメリカ大統領選挙はア

ジアにも影響が大きいので、国内の報道だけでなく中国語の報道も斜め読みしていた。すると驚いたことに「telangpu（特朗普）」という従来の表記は官製メディアを除き殆ど使用されず、「chuanpu（川普）」という表現が大勢を占めていることに気がついた。「chuanpu（川普）」の音節末子音には母音ɥが挿入されており、従来の表現と同じだが、頭子音を見てみると、英語の「r」を中国語のそり舌音ch-「ʃ」で表している。母音を挿入するという中国語のルールに従った「謙虚で健気なアウトプット」ではなく、むしろ原音に近づけようとする強い意思が垣間見られる。「大胆なアウトプット」である。というのも、英語のɥは日本語の歯茎音のɥよりも舌が後ろよりであり（後部歯茎音、舌先を歯に付けない後ろ寄りの発音）、たとえばtimeという英単語の場合、（批判を恐れず敢えてカタカナで表記すると）「タイム」よりも、むしろ「チャイム」に近い。特に英語ではtryやdryのようにɥが後続する場合は後舌化が顕著に現れる。某飲料メーカーのスーパードライというお酒のコマーシャルでは日本語と英語でそれぞれ商品名が発せられるが、日本語がそのまま「ドライ」というのに対して、後者の場合は「チュライ」が如き発音である。これも後部歯茎音だからである。

この「特朗普」から「川普」への変化は、中国語話者の間で母語のルールに忠実に従おうとする制約（子音連続禁止）よりも、むしろ英語の原音に近い音でアウトプットしようという動機が強く働いた結果であろう。また一音節である「Trump」を三音節の「特朗普」で表すよりも、二音節の「川普」で表したほうが音節数の面においてもより原音に近くなる。このような変化が生じた要因については不詳だが、一つには英語を巧みに操る中国語話者の数が増加したこともあるだろう。またインターネット上で「川普」という表記が多く見られることも無視できない。

クリントン氏の大統領選出を確信していた私はこの表記上の争いについては「謙虚で健気なアウトプット」である保守派——「トランプ（特朗普）」の圧勝を信じて疑わなかった。なぜならクリントン氏が勝利すれば、「大胆なアウトプット」である「チュワンプ（川普）」は話題にあがることもなく、すぐに消えてしまっただろうと高を括っていたからである。しかし、結果は真逆であった。インターネットで検索してみても「川普」という表記は確固たる地位を築きつつあるようである。このような音声と表記の争いはあらゆる言語が度々直面してきたことである。日本語が漢字音を借用する時、中国語が異邦の地名や人名を漢字で表す

時、身近なところではハリウッドの役者の名前をカナで表記する時など（雑誌によつて表記に異同があるため子どもの頃からいつも不思議に思っていた）、どれも母語と外来語、表記と音声の聞き合ひの産物である。ここに言語研究の醍醐味の一つがあると私は思っている。

このような表記の交替をリアルタイムで見ることができたことに喜びを覚えると同時に昔の思い出が不図蘇ってきた。中学生の頃、修学旅行でデイズニードに行くこととなった。年配のツアーガイドさんの案内で都心から舞浜まで向かう道中、彼が「トゥーンタウン」というテーマパークのことを「トゥーンタウン」と発音したのである。彼の音韻体系からすれば「トゥ」という発音は制約上許されないため、規則通りに「ツ」とアウトプットしたに過ぎないわけで、どちらが正しいということもないのだが、無礼なことに同級生たちの間からどつと笑いが起きた。しかしそんな彼らも「Disney sea」を「デイズニー・シー」とか、略称して「シー」と言っているにちがいない。母語の規則を打破し原音を優先するならば、「スイー」と言うべきである。いまはまだ小さな子どもたちが、或いはさらにその子どもたちが将来「スイー」と言う音声を受け入れた時、私の「シー」という発音を笑うだろう

か。いまから楽しみである。

誤読のユートピア

藤野志織

小さい頃から本が好きで、読むことが楽しくて、大学院へ進学した。しかし、いざ学問の世界に足を踏み入れてみると、自分がまったく「読めない」ことに苦しめられ、あるうことがフランス文学というフィールドを選択してしまったために、苦悶は一層深まった。僅かでも外国語を直に読むという営みに手を染めた人間なら誰しも、突然濃い霧に包まれて途方に暮れる心細さを味わったことがあるのではないか。そして、最も恐ろしい罨は、この瞬間に仕掛けられている。なんとなく意味が通るほうへ、するすると引き寄せられてしまうのである。そして気づけばたった独り、現実から遊離した桃源郷の虜になっている。この類の思い込みは、他人に指摘されるまで気づかないことが多い。虚心坦懐に対象と向き合い、正確に「読む」ことを本

懐とする学術研究においては、このような独りよがりや決めつけは唾棄すべき行いであり、厳しい叱責の対象となる。

しかし翻って、誤読というものは外国語だから起るのではない。そして厳肅な学術的営為から身を引き離し、誤読を眺めてみると、存外に面白かったりする。より広くとって、「見間違い」「聞き間違い」「勘違い」でもいいのだが、それらは時に「詩的」と形容しなくなるほどの強度を備えていることすらままある。この「強度」とはひとまず他者に語らせる力であると言えるだろう（生物が子孫を残すことにより生命を繋ぐように、無生物は語られることにより生き永らえる）。そして、アンドレ・ブルトンという人物は、この「誤読の詩学」の推進者であったという点でも興味深い。ブルトンは詩人であり、シュルレアリスム運動の領袖であり、彼にとつて書くことは人生そのもの、また最大の武器でもあった。しかし、彼が言葉による伝達に、精確さや透明性を希求していたかといえばかなり疑わしい。伝わらないことを延々と書き続けた狂人であったというのではない。むしろ、人間が一人ひとり違うことに、また一人の人間が刻々と変わっていつてしまうことに、あまりにも意識的であったため、一種のあきらめのうちに、思うところを遠慮構わず書き倒した

奇人であったというべきか。そして彼の詩学はまた、理解の隔たりのうちに打ち立てられている。

その一端が示されているのが、伝言ゲームの分析に基づいた同人の詩論「ヴァリアントのオートマティスム」(一九三五)である。「オートマティスム」とは、主観的な判断や意識的なコントロールの及ばない、一種の夢の状態を指す。ブルトンが詩作にあたってこれに大きく依拠し、自動記述*écriture automatique*を打ち立てたことはよく知られている。共同的な自動記述実践が下火になった後も、ブルトンは集団遊戯を通して、オートマティスムをめぐる詩的探求を深めていたのである。それではなぜ伝言ゲームがオートマティスムに関わるのか。耳元で囁かれる短い一文を素早く書き留め、すぐさま隣の人間に口述する。聞き直すことも、ゆっくり理解してから伝えることもできないなかで、意識的な判断はすばみ、無意識による処理が優勢になる。ここにオートマティスムと同様の状態が現れるとブルトンは考えていたようだ。そして、そうした慌ただしい伝達の過程で元の文章は多くの場合、図らずも「誤って」伝わることになる。これがオートマティスムによって生まれるヴァリアント(異文)である。ゲームの参加者が奇を衒ってフレーズに手を加えている訳ではない点をブルトンは強調する。彼らは緊

張した面持ちで、曲芸師さながらに、か細い意味の糸を渡っていく。

元のモデルを唯一の正解とするならば、そこからのずれは「誤読」と見做される。しかしブルトンは、ヴァリアントを誤読の集積と片づけるのではなく、そこに無意識の欲望に導かれるヴィジョンを看取し、変形を被りながらも保たれる詩情に関心を示す。このようにヴァリアントに積極的な意味を見出している点に、筆者はブルトンの「誤読の詩学」の片鱗を認めたい。詩人がゆくりなく到来する言葉に終生強く執着したことを想起すれば、「誤読」によりヴァリアントを生み出す場は、新しい視界を拓く装置と言えるかもしれない。少なくとも、そのように考えてみることは、読むことの自由と軽さを取り戻してくれるように思われる。差し出された言葉は「わたし」のことはで語り直されることを求めていると信じよう。読むまま、感じるまま語ることを至上命令とする「誤読」のユートピアを、私は日々夢想するのである。

接続と切断の科学史にむけて

岡澤 康浩

「第二部門のセミナーには必ず出席してください。」

ダストン先生は温厚な方ですが、セミナーに出席されない方には、とても厳しい態度を取られます」博士論文の最終作業を行うためにマックス・プランク科学史研究所を訪れたわたしは、ロレイン・ダストン先生の秘書の方からそう告げられた。ダストン先生が率いていた第二部門のセミナーには、言語も分野も超えて様々な人々が集っていたけれど、セミナーには全員が参加して議論に参加することになっていた。それは、確かに研究所からも事前に義務として伝えられていたけれど、その言葉は建前以上の重みをもっているらしかった。

フランシス・ベーコンの登場とともに展開されることとなった、事実にもとづく新しい認識論は、事実の収集を可能にする新しい共同体と、そうした共同体を可能にする社交性と倫理とを備える新しい自己とを必要とした。そんな風に、科学的認識の歴史を科学者同

士の接続の技法からたどり直してきた科学史家が、自分自身もある種の知的共同性を信じそれを実践していたとしても、それほど驚くべきことではなかったのかもしれない。実際、歴史家としては珍しく、ダストン先生の研究成果の多くは、共著の著作や、共同研究をまとめた論文集という形で発表されていた。第二部門のセミナーで質問者が使う独特のハンド・シグナルも、一人の質問者が会話を独占してしまうことを防ぐために導入されていたように思う。そこで実践されていた相互接続の技法は、実際に優れた研究成果を生み出していたようだけれど、わたしの印象に強く残ったのは、そうした接続へと賭けられていた情熱と倫理であり、それにしがたがって営まれる生き方だった。

知的共同性にせよ、それを支える社交性にせよ、その種類はもちろん一つではありえない。だから、ある特定のタイプの接続を志向することは、同時に異なるタイプの接続が作り出すネットワークから意図的に切断することでもありえる。異なる接続のモードにおいては、異なる振る舞いが要求され、推奨されるからだ。助教に採用されて始めて訪れた人文研で、研究所における共同研究という独特のシステムについて説明を受けた時には、アマチュアであることを恐れずに、分野を超えた共同研究の場に積極的に参加するようにとア

ドバイスされた。それはまずなによりも、ハイブリッドな知的共同性がもたらしうる快樂への招待だったけれど、わたしにはそれが、人文研の歴史の一部に根ざす独特な倫理への招待でもあるように思えた。

人文研での共同研究についてわたしが知っていたことのほとんどすべては、桑原武夫の著作を通したものだ。フランス文学者としてのがれが行った研究について、わたしはなんの知識も持っていない。けれど、胸を張って専門と呼べるものもなく、論文を書くよりもおしゃべりをするこのほうが好きなわたしは、桑原の生き方や、かれが時折見せる独特のアマチュア主義を、いつも興味深く思っていた。

人文研での共同研究の重要性を信じ、それを推進してきた桑原は、自身の最終講義においても共同研究のあり方を議論の対象に取り上げている。ウィーナーの『サイバネティクス』をもちだす桑原は、自然科学と工学における協働をモデルに、学際的研究がもちうる知的生産性という、凡庸で穏当な意見を述べることもできただろう。だが桑原は、ウィーナーの邦訳本はすべて読んだが、数式は飛ばして読んだのだとわざわざ聴衆に告白してみせる。そして、桑原の推進する共同研究など所詮は耳学間に過ぎないという批判に対しても、なかば開き直るかのように耳学問を擁護する。そ

の発言に、貴族的サロン文化の残滓や、知的ディレッタンティズムを見ることはおそらく可能であり、また妥当でさえあるかもしれない。けれど、そのことと、桑原もまた学的共同性を支える知的倫理を探究していたということは、両立するようにわたしには思える。

もちろん、人文研での共同研究を可能にしたのは、倫理だけではない。そこでは、知的共同性を維持するためのさまざまな実践が発明され、メディアやモノが動員されてきた。人文研のもうひとつの伝統であるフィールドワークは、専門家と現地住民を、そしてまた異なる専門家たちを出会わせる技法でもあった。人文研東西部の共同研究の歴史において重要な役割を果たしたという、同一のテクストを精読する会説という実践や、共同利用できる目録の編纂、そして東西部専属の写真家によって撮られたという大量の写真もまた、そうした共同性を立ち上げる装置だったのだろう。桑原自身も、公開講座や商業出版といった、専門家と一般聴衆の接続を志向するような実践に積極的に参加していたし、自分が率いた研究班の班員に情報カードというモノを配付することで、集積されたカードが共同研究グループの共有財産として機能するはずだという独自のメディア理論も温めていたようだ。そんな桑原にとっては、数式を飛ばして本を読み、座談会でおし

やべりに興じてみることをさえも、専門家同士の接続とは別の形で、接続の新しい回路を作り出すための決死の賭けだったのかもしれない。

そう考えてみれば、共同研究という営みを通して接続の形式についての理論と実践が深められてきた人文研という場所が、優れたメディア論者とメディア実践を生み出してきたことも偶然ではなく思えてくる。人文研の助手を長く務め、最初期のメディア理論家でもあった加藤秀俊氏は、新たな接続の方向を模索する中で、よりよいコミュニケーションをデザインするため、大学の外にシンクタンクを設立するに至った。同じく人文研の助手であり、最新のメディア論に通じていた浅田彰氏は、専門知のためでも大衆啓蒙のためでもない、新しい知の回路を作るというメディア的実験のために『GS: たのしい知識』を創刊し、後には「交通」の思想家でもある柄谷行人氏と『批評空間』を編集した。ニューアカデミズムとも呼ばれたその運動は、専門知からの切断として非難されもしたけれど、それはまた新しい知的共同性と新しい接続の倫理の模索でもあったのだろう。

時代は変わり、知的交流を支える接続と切断のモードも変わる。その変化とともに、大学の役割も変わっていくのだろう。もしかしたら未来には、「シラス」

のような大学の外につくられる新しい接続の場が、大学よりも重要となることもあるのかもしれない。時間と空間、専門分野と教育レベル、利害関心と政治的信条、そして言語や性別や人種によって、わたしたちはたやすく分断されてしまう。知的共同性の歴史とは、そうした分断をあえて乗り越えようとする接続の歴史であり、そうした接続を支える倫理と、実践的技法と、メディアと、マテリアルな環境の織り上げる歴史である。そして、ある特定の仕方での接続を求めることが、しばしば別の接続の方法からの切断を意味する以上、接続の歴史は同時に切断の歴史だとも言えるのだろう。

科学の歴史を接続と切断の歴史として描いてみると、それがわたしの最近の関心なのだけれど、そんなことが実際に可能なのは、まだよくわからない。けれど、接続と切断の科学史というものをもし書くことができるのだとしたら、知的共同性のための理論と実践が追究されてきた人文研は、その仕事にびつたりな場所なのかもしれない。

常 顔音痴な私とオンラインでの日

楊 維 公

パンデミックが始まってから早くも二年が経った。当初は、少しさえ我慢すればすぐ普通の生活に戻れると思っていたが、いまだに終息が見えずにいる。というより、リモートワークのノウハウが積み重なった結果、対面をなるべく避けてオンラインで交流することが普段の生活になった気さえする。

私にとって、このパンデミックの二年間は、自分が置かれた環境にたいへん大きな変化が起きた二年間である。パンデミック下で博士論文を提出し、試問を経て博士号をいただいた。大学院を出たあとは非常勤講師をかけ持ちしてなんとか在留資格を取得して日本に残ることができ、そして人文科学研究所に職をいただくことになり、昨年九月に着任した。しかし、私の場合、人生においてもっとも大きいともいえるほどの変化が起きたこの二年間はなぜかあまり実感を伴わないようである。おそらくこの二年間に私が参加した行事

の大半はオンラインで行われていたことが大きく影響しているだろう。振り返ってみれば、私が学生としての最後の一年間の日常、大学勤務一年目の日常、そして人文研に入ってから日常は、ほとんどオンラインでの日常と言ってもいいほどである。会議はもちろん、授業も半分以上がオンラインで、人文研に入る前につとひそかに憧れていた研究室も今参加しているものはすべてオンラインで行われている。

オンラインという形式にすっかり慣れてきてはいるが、私にとって一つだけ大きな不便がある。それは、人の顔がいつまで経っても覚えられないことである。ただでさえ顔音痴な私にとって、ほとんどが初対面の所員の先生方の顔を覚えるのは実にひと苦労である。着任時にいただいた所員の顔写真付きの要覧を片手にして必死に覚えようとしても、学内ですれ違った時は互いにマスクを着用しているため、画面上でしか見たことのない顔をマスク越しで判断するのは私にとってはやはり至難の業で、結局どなたがどなたかはいまだにわからないまま半年が過ぎてしまった。この半年の間につかんだコツは、失礼な人間と思われないうちに学内で目が合った人にはとりあえずべこつと会釈しておこう、ということである。

一方、顔音痴だけでなく、人前で人の顔を見ながら

話すことも苦手な私にとって、オンラインでの行事ならいささか気楽に参加できるというメリットの存在も否めない。特に緊張感が溢れる研究班で本を会読することもオンラインになるとなんだか緊張感が少し和らいだようで、なんとも不思議な感覚が伴っている。

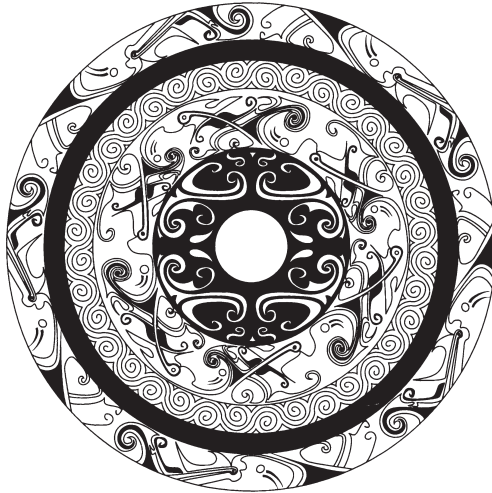
というのは、私は以前から「読み方」ということ、とりわけ個人で読むことと集団で読むことの相違に興味を持っているからである。そのきっかけとなったのは、日本に留学に来てから、日本で行われている会読形式の読書会に驚きを覚えたことである。それまで私にとっての読書は家で横になってゴロゴロしながらページをめくることであり、いわばプライベートな空間で一人で行う、かなり私的な行為であった。無論、中国に読書会が存在していなかったわけではないが、事前に各自でテキストを読んでから感想を述べ合うことがほとんどで、日本のように読書会の場でテキストを逐字読み上げて翻訳してからその意味を討論する形式は私は経験したことがなかった。もし読むという行為をあえて個人的と集団的に二分するならば、事前に読むから感想を述べ合うものはあくまで個人的な読み方の延長線上にあるようなもので、日本のような会読は集団的な読み方と言えるかもしれない。

ところが、この集団的な読み方の場がオンラインに

なると、その意味がいささか変わってくるような気がする。どうやらオンラインでの会読は個人的な面と集団的な面を併せ持っている。確かにみんなでインターネットという擬似的空間に集まっていることは事実だが、実際個々人の体が置かれている現実的空間には他者はおらず、なんならリラックスした体勢で参加したり、あるいはこっそりと別の本やネットで調べたりすることも可能である。対面で会読していた時でも、スマートフォンを机の下に隠しながら検索することもやっていたが、今ほど堂々とパソコンを開いてネットで調べることはできなかった。私からすれば、こうした緊張感とリラックス感が同時に存在するのはオンライン読書会ならではのことである。そして、会読の場に限らず、個人的と集団的な面を併せ持つ点では、あらゆるオンラインでの行事は共通している。この意味で、昨今のオンラインでの日常は臆病な私にとって本当に気楽である。強いていえば、そのデメリットは私のような顔音痴は永遠に人の顔が覚えられなくなるのと、そして会が終わってからの楽しみとなる飲み会がなくなることもくらいかもしれない。

とはいえ、人の顔が覚えられない、そして飲み会をはじめとした社会的交流が途絶えたことはやはり日常の大きな楽しみを奪ったことになる。私の顔音痴がさ

らに重症化しないためにも、パンデミックが一日も早く終息して、気兼ねなく対面で集まることができるように心から願っている。また、万が一私とすれ違った際に私からなら反応もなかったら、この人は顔音痴だと思いついていただき、そしてどうかその無礼をお許しただければ幸いである。



書いたもの一覧 二〇二二年四月～二〇二二年三月（氏名五十音順） ●は単行本

池田 巧

Negation in Mu-nya. 林範彦・池田巧（共編）『シナチベ

ット系諸言語の文法現象⁵ 否定の多様性¹』

京都大学人文科学研究所 二月

Directional prefixes in Tangut and Mu-nya: A Contrastive Study. (共著) 荒川慎太郎・池田巧（共編）『シナチベ

ット系諸言語の文法現象³ 方向接辞の機能¹』

京都大学人文科学研究所 二月

Directional prefixes in Mu-nya. 荒川慎太郎・池田巧（共

編）『シナチベット系諸言語の文法現象³ 方向接辞の

機能¹』 京都大学人文科学研究所 二月

石井美保

「止まった時間」を生きる―学校事故をめぐる倫理的応答の

軌跡 文化人類学 八六巻二号 九月

The Code of Pangolins: Interspecies Ethics in the Face of

SARS-CoV-2 *Current Anthropology* 62(5) 十月

解説 トム・ヴァン・ドゥーレン『フライト・ウエイズ』

現代思想 五〇巻一号 一月

●官能の人類学―感覚論的転回を超えて（共編著）

ナカニシヤ出版 三月

序章（共著）石井美保・岩谷彩子・金谷美和・河西瑛里子

編『官能の人類学―感覚論的転回を超えて』

ナカニシヤ出版 三月

ゾーエーの海に身を浸す―妖術者と女性司祭のセクシュアリ

ティと官能性 石井美保・岩谷彩子・金谷美和・河西瑛里

子編『官能の人類学―感覚論的転回を超えて』

ナカニシヤ出版 三月

石川 禎浩

結党一〇〇年を迎える中国共産党・成立までの歴史に残るさ

まざまな「謎」 オンライン雑誌 *Nippon* コム 四月二日

●中国共産党、その百年 筑摩書房 六月

●「紅星」―世界は如何知道毛沢東的？

「革命党」の本質変わらず／大国率いる政権党、問われる役

割 時事通信配信記事 六月三十日

記念と展示に見る中国共産党第一回代表大会

学士会会報 九四九号 七月

●中国共産党成立史（増訂版） 香港中文大学出版社 七月

著者に会いたい／中国共産党、その百年

朝日新聞 七月三十一日

読書 《紅星照耀中国》 曾經過毛沢東的審査嗎？

文匯報 八月四日

序二 東洋文庫現代中国研究班主編『集体化時代の中国…日
中共同研究』 東洋文庫 九月

報告Ⅰ／結党から建国初期 中国研究月報 八八四号 十月
第三三回アジア・太平洋賞受賞者インタビュー

アジア時報 五七一号 十一月
習近平体制の歴史決議／オビニオン・論点

毎日新聞 十二月十五日
対談 中共成立史の考據原則（毛升氏と） 明報 一月十八日

対談 中共成立史的東亜背景（毛升氏と） 明報 一月二十五日
受賞者あいさつ（アジア・太平洋賞特別賞）

アジア時報 五七三号 一月
●How the “Red Star” Rose: *Edgar Snow and Early Images*
of *Mao Zedong*, The Chinese University of Hong Kong
Press

受賞のことは——中国の偉大なる復興／理想達成の先
は？ 遼 八二号 一月

対談 中共「一大」以来の党史変化（毛升氏と） 明報 二月八日

中国共産党一〇〇年目の歴史決議
国際問題 七〇五号 二月

司馬遼太郎賞を受賞して 山形新聞 三月三日

対談 毛沢東と習近平（池上彰氏と） 文藝春秋 一〇〇巻四号 三月

稲葉 稜

漢籍史料からみたアフガニスタン 前田耕作・山内和也編
『アフガニスタンを知るための70章』 明石書店 九月

●イスラームの東・中華の西―七〜八世紀の中央アジアを巡つて
臨川書店 三月

稲本 泰生

●国際ワークショップ 参考資料集 仏教と道家系の「見え
る」ものや「見えない」もの（編）

京都大学人文科学研究所 二〇二一年三月
編集後記 仏教芸術 七号 九月

編集後記 仏教芸術 八号 三月

岩城 卓二
●本興寺文書 六卷（共編） 清文堂出版 十二月

地域博物館の展覧―「共創」による「社会総掛かり」―
地域研究いたみ 五一号 二月

尼崎市史編纂と尼崎郷土史研究会―「市民のため」の挫折と
成熟― みちしるべ 五〇号 尼崎郷土史研究会 三月

ウィットルン クリステイアン
“Zen, Motorcycles and Burning Buddhas” *Hualin Interna-*
tional Journal of Buddhist Studies (HIJBS), 3, 1, 五月

<https://dx.doi.org/10.15239/hijbs03.02.06>

“Digital Texts in Practice” *Journal of the Text Encoding*

岡澤 康浩

●翻訳 ロレイン・ダストン、ピーター・ギャリソン「客観性」(共訳) 名古屋大学出版会 八月

書評 ロレイン・ダストン、ピーター・ギャリソン『客観性』 Tokyo Academic Review of Books 二九号 九月

新刊紹介 ロレイン・ダストン、ピーター・ギャリソン「客観性」 REPRE 四四号 三月

岡村 秀典

●東アジア古代の車社会史 臨川書店 七月

●雲岡石窟の考古学研究 四川人民出版社 十月

船載された王莽宮廷鏡—大阪府紫金山古墳出土方格規矩四神鏡の鉛同位体比分析から 史林 一〇四卷五号 九月

千石コレクション漢六朝青銅器の化学分析(共著) 東方学報 九六冊 十二月

菊地 暁

趣旨説明・近代／戦後を紡ぎなおすために

人文学報 一一七 五月

モノをはこぶヒト 京都文化博物館編・発行『戦後京都の

「色」はアメリカにあった—カラー写真が描く—オキユバ イド・ジャパン—とその後』 七月

「民俗写真」研究、道半ば

さらにいくつもの〈こども風土記〉のために・大正台湾編—『台湾小公学校児童文集』を読む— 大塚英志編『運動としての大衆文化：協働・ファン・文化工作』 水声社 九月

特集 「東アジアの民俗学—歴史と課題—」趣旨説明 人文学報 一一八 十一月

〈一国民俗学史〉ノムコウ—あるいは、比較民俗学史のための準備体操— 人文学報 一一八 十一月

ゆるふわ 保護制度と生活のなかの遺跡

遺跡学研究 一八 十二月

●ライフヒストリーレポート選 二〇二一(編著)

京都大学民俗学研究会 十二月

書評・文化の創造のあり方を考えさせてくれる一冊 鶴野祐介『子どもの替え唄と戦争・笠木透のラストメッセージ』 子どもの文化 五四／一 一月

●民俗学入門 岩波新書 一月

●記念誌 市川秀之先生還暦記念 日本民俗学講習会(編著)

送辞 佐藤健二退職記念会編・発行『葦を編む・佐藤健二の仕事』 同会世話人 三月

倉本 尚徳

善導の在家弟子に見る臨終行儀—新出「念弥陀仏誦弥陀経行者」墓誌銘について—

印度學佛教學研究 七〇卷一号 十二月
北齊の仏教 氣賀澤保規監修 『中国史書入門…現代語訳北齊書』 勉誠出版 十二月
翻訳 李百藥 氣賀澤保規監修 『中国史書入門…現代語訳北齊書』 勉誠出版 十二月

吳 孟 晋

〔動向〕美術 『中国年鑑二〇二二』 中国研究所 五月
修理報告 国宝絹本着色宮女図(伝桓野王図)(岡岩太郎と共著) 学叢 四三号 六月
作品解説 『特別企画 オリュンピア×ニッポン・ピジュツ』 京都国立博物館 六月
展図録
作品解説 『特別展 京(みやこ)の国宝―守り伝える日本のたから―』展図録

文化庁・京都国立博物館・読売新聞社 七月
明・林良筆 老松棲鸞図(特輯 明清絵画の新たな視点) 國華 一五一〇号 八月
〔臥遊千里図画冊〕(唐招提寺藏) について 大和文華 一三九号 九月

作品解説 『特別展 畠山記念館の名品―能楽から茶の湯、そして琳派―』展図録

京都国立博物館・畠山記念館・日本経済新聞社・NHK京都放送局・NHKエンタープライズ近畿 十月
国をうごかす動物たち―民国期中国における嶺南画派の猛

獣・猛禽画について―(特集 ヴィジュアル・レトリック再考) 美術フォーラム二一 四四号 十二月
〔旧王孫〕が紡いだ詩画の縁―薄儒と須磨弥吉郎、そして伊藤紫虹の「合作」について― 板倉聖哲・塚本麿充編『コレクションとアーカイヴ―東アジア美術研究の可能性―』 勉誠出版 十二月

交友と協業のコレクション―野崎家と森家にある来船清人の書画について― 『関西中国書画コレクション研究会設立十周年記念国際シンポジウム報告書 中国書画コレクションの時空』 関西中国書画コレクション研究会 三月
第四章 美術―台湾をいかに魅せるか―/第四章 演劇―伝統と現代、それぞれの試み― 赤松美和子・若松大祐 編著『台湾を知るための七二章』 明石書店 三月

古 勝 隆 一

●漢唐注疏写本研究 社会科学文献出版社 五月
隋朝における一切経書写の意義―『宝台経蔵』をめぐる伊東貴之編『東アジアの王権と秩序』 汲古書院 十月
礼体系の継承と変容―性差の観点から 富谷至編『岩波講座世界歴史』第五卷 岩波書店 十一月
●中国中古の学術と社会 法藏館 十二月
『文史通義』内篇四譯注(共訳) 東方学報 第九六冊 十二月

小 関 隆

●イギリス1960年代：ビートルズからサッチャーへ

中央公論新社 五月

European Crisis in Historical Perspectives (with Serena Ferente) *Zinbun* no. 52 三月

Book Review: David Cannadine, *Victorious Century: The United Kingdom, 1800-1906* (with Shusaku Kanazawa)

The East Asian Journal of British History vol. 8 四月

クロスオーバー書評：新書における歴史叙述をめぐって 小関隆著『イギリス1960年代―ビートルズからサッチャーへ―』、金澤周作著『チャリテイの帝国―もうひとつのイギリス近現代史―』を読む(金澤周作との共著)

女性とジェンダーの歴史 九号 二月

小 堀 聡

●社会経済史学事典(共編著)

丸善出版 六月

編集後記 社会経済史学 八七巻二号 八月

Book Review: Nishino, Toshiaki. *Nihon chihai denkashi ron: Jūnin ga denki o tomoshita rekishi ni manabu* [The history of rural electrification in Japan: Learning from cases in which regional residents promoted electrification]. Tokyo: Nihon Keizai Hyoronsha, 2020. *Japanese Research in Business History* (38).

十二月

産業政策の展開―商工省と大阪府・大阪市 エネルギー革命と公害―技術革新と住民運動 平井健介・島西智輝・岸田

真編『ハンドブック日本経済史―徳川期から安定成長期まで』 ミネルヴァ書房 十二月

佐藤 淳 二

啓蒙への問い 相澤ほか共著『狂い咲く、フーコー』 読書人新書 八月

白須 裕 之

『文史通義』内篇四譯注 東方学報 九六冊 十二月

瀬戸口 明 久

進化論 野生生物 農業と害虫 生物多様性 日本科学史学会編『科学史事典』 丸善出版 五月

自然保護 社会経済史学会編『社会経済史学事典』 丸善出版 六月

●翻訳 ロレイン・ダストン、ピーター・ギャリソン『客観性』(共訳) 名古屋大学出版会 八月

書評 岡本拓司『近代日本の科学論』 図書新聞 三五〇九号 八月

コメント 反科学論 塚原東吾ほか編著『よくわかる現代科学技術史・STS』 ミネルヴァ書房 二月

高井 たかね

●翻訳 楊鴻勛『唐長安 大明宮』上・下(共訳)

高井 たかね

科学出版社東京・ゆまに書房 五月

竹久夢二研究(竹久夢二学会誌) 三号 三月

高木博志

戦争前夜の寿岳文章 『寿岳文章 人と仕事 展』

高階 絵里加

東京美術学校時代 ベルギー留学時代 黄海海戦を描く

向日市文化資料館 三月

明治維新と京都御所 グリーンパワ―

森林文化協会 五〇九 六月

近代天皇制と「陵墓」 陵墓限定公開40周年記念シンポジウ

ム実行委員会編 『文化財としての「陵墓」と世界遺産…

「陵墓限定公開」40周年記念シンポジウム』新泉社 六月

社会を描く―笠木治郎吉「下校の子供たち」と星野画廊

『企画展示 学びの歴史像―わたりあう近代』

国立歴史民俗博物館 十月

序論 京都の近代―美術・工芸と教育の歩みを重ねて 『美

術の教育／教育の美術』

京都工芸繊維大学・美術工芸資料館 十月

意見書・近現代大嘗祭の歴史的特質 京都・主基田拔穂の儀

違憲訴訟(京都地方裁判所)

近代天皇制と洞村移転 朝治武・黒川みどり編 『近代の部落

問題』

解放出版社 三月

寿岳文章と向日庵本時代 向日庵5

NPO法人向日庵 三月

電車が生駒にやってきた 『生駒歴史タイムス』創刊号

生駒市図書館・市史編さん係 三月

京都時代、竹久夢二のロマン主義と花街・遊廓

竹久夢二『西海岸の裸婦』についての試論
資源研究・活用プロジェクト 十二月
竹久夢二研究 三号 三月

竹沢泰子

『環太平洋地域の移動と人種』を語る―序論と拙論から

マイノリティ研究会ニュース 九〇 五月

Japan's Modernization and Self Construction Between

White and Yellow. Shona HUNTER and Christi van

der WESTHUIZEN (eds.) *The Routledge Handbook of*

Critical Studies in Whiteness. London: Routledge. 一月

●人種主義と反人種主義―越境と転換 竹沢泰子×ジャン・フ

レデリック・シヨブ編 京都大学学術出版会 三月

序論 非英語圏からの共同発信の試み(ジャン・フレデリッ

ク・シヨブと共著)

「人種」と「文明」 明治期の教科書記述にみる世界認識の変

容

遺伝的祖先と人種の解体／再生 解説 遺伝子検査による祖

先(ルート) 検査とは

● Yasuko Takezawa et Jean-Frédéric Schaub eds. *La race*

objet des sciences sociales, un dialogue franco-japonais,
(オープン・アクセス) École des hautes études en sciences sociales 三月

Theorizing People of Mixed Race in the Pacific and the Atlantic (Stephen Small と共著). *Social Sciences* (オープン・アクセス) 十一月(二) 三月

「人種」は見えるものか 社会的に作られる認識を

朝日新聞 三月八日

立木 康 介

● 狂い咲く、フーコー——京都大学人文科学研究所 人文研アカデミー『フーコー研究』出版記念シンポジウム全記録+(プラス) (共著) 読書人 八月

〈物〉の秘密—フロイトのリアリティ論からラカンの「現実界」へ 思想(岩波書店) 二〇二一年第八号 八月
ラカンのいる風景—フランス精神分析史のなかのラプランシユ 精神分析研究 第六五卷四号 十一月

● 翻訳 ミッシェル・ワッセルマン『ポール・クロードルの黄金の聖櫃—(詩人大使)の文化創造とその遺産』(共訳)

水声社 三月

都 留 俊太郎

現代台湾の地方志編纂とジェンダー

歴史評論 八五五号 七月

直野 章子

針路二一 コロナ禍の子ども また歌えなくなった

神戸新聞 五月二四日

第五回「原発と人権」全国研究・市民交流集会。ふくしま分科会「人間と核の関係を考える」報告 日本政府の核政策と被爆者対策—被害認識と正義回復への遠い道のり

反核法律家 一〇七号 六月

現代のことは 引き裂かれた親子

京都新聞(夕刊) 八月五日

「黒い雨」被爆者認定—戦争遂行の責任果たせ

共同通信配信(長崎新聞、西日本新聞、東京新聞ほか)

八月六日ほか

針路二一 平和主義の実践 子どもにどう教えれば

神戸新聞 八月三十日

「原爆の絵」にみる被爆の記憶

広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告 第一七号

九月

現代のことは コロナ禍の格差拡大と子どもの貧困

京都新聞(夕刊) 十月二六日

現代のことは 「被爆体験の継承」再考

京都新聞(夕刊) 一月十四日

現代のことは 空襲被害と「受忍論」

京都新聞(夕刊) 三月十七日

針路二一 ウクライナ侵攻と核 危機に乗じた「共有」論

神戸新聞 三月二八日

永田 知之

上野本《文選》小議 下東波編『縞紵風雅 第二屆南京大學
域外漢籍研究國際學術研討會論文集』 中華書局 十二月
『文史通義』内篇四訊注（共訳） 東方學報 九六冊 十二月
詩歌に伴う書簡—『万葉集』と唐代前期までの詩の贈答を通
して— 鉄野昌弘・奥村和美編『萬葉集研究』四一集
塙書房 二月

中西 竜也

二〇二一年度 龍谷史学会 定期總會講演録 中国ムスリム
研究の魅力と課題 龍谷史壇 一五三号 十二月
明清時代のムスリム—マイノリティとしていかに存続したか
吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学—アジア・アフリカへの
問—158』 ミネルヴァ書房 一月

野原 将揮

学会展望・文字・訓詁

●秦簡牘通假例 日本中国学会報 七三集／中国語学 二六八号
说「狗」（共著） センター研究年報二〇二一 二月
岩田礼教授栄休記念論文集 三月

平岡 隆二

江戸の天文暦学・西洋天文学知の多様な自己化 日本科学史
学会編『科学史事典』 丸善出版 五月
沢野忠庵、ビュルケル、西学書、坤輿万国全図、長崎遊学

洋学史学会監修・青木歳幸ほか編『洋学史研究事典』

思文閣出版 九月

Deciphering Aristotle with Chinese Medical Cosmology:
Nanban Unkiron and the Reception of Jesuit Cosmology
in Early Modern Japan. Bill M. Mak and Eric Hun-
tington (eds.) *Overlapping Cosmologies in Asia: Trans-
cultural and Interdisciplinary Approaches*. Brill. 一月
長崎歴史文化博物館収蔵「伊能図」 平井松午・島津美子編
〔稿本・大名家本〕伊能図研究図録』 創元社 三月
東西コスモロジーの出会いとキリシタン文献 岸本恵美・白
井純編『キリシタン語学入門』 八木書店 三月

福谷 彬

『文史通義』内篇四譯注 東方學報 九六冊 十二月
『陳亮集・増訂本』抄訳（二）—「廷対」訳注（2）—
論叢アジアの文化と思想 三〇号 一月

福家 崇洋

二〇二〇年の歴史学界—回顧と展望— 思想
松尾尊兌と大正デモクラシー研究 史学雑誌 一三〇巻五号 五月

宮崎家所蔵宮崎滔天関係資料目録 人文学報 一一七号 五月

社会運動の諸相 筒井清忠編『大正史講義』 人文学報 一一七号 五月

筑摩書房 七月

国家改造運動 筒井清忠編『大正史講義』 筑摩書房 七月

三谷太一郎と『大正デモクラシー論』 吉野作造の時代とその

後 日本史研究 七〇八号 八月

大正デモクラシー論再考 戦後民主主義との関連から

二十世紀研究 二二二号 十二月

●近代文化人ネットワーク 太田喜二郎の周辺(共編)

京都大学人文科学研究所みやこの学術

資源研究・活用プロジェクト 十二月

満洲事変と十月事件 中央公論 一三六卷一号 十二月

大正時代の関西 上 社会にどう向き合う 河上肇の問い

毎日新聞(夕刊) 一月十五日

日本遺族会と靖国神社国家護持運動 蘭信三・石原俊・一ノ

瀬俊也・佐藤文香・西村明・野上元・福岡良明編『シリ-

ズ戦争と社会四 言説・表象の磁場』 岩波書店 二月

書評 黒川伊織『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニス

ト』 歴史評論 八六二号 二月

初期社会主義と部落問題 朝治武・黒川みどり・内田龍史編

『近現代日本の部落問題一 近代の部落問題』

解放出版社 三月

養徳社の誕生 奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈

良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書 三 奈良に

蒔かれた言葉 近世・近代の思想』

京阪奈情報教育出版 三月

藤井律之

『文史通義』内篇四訳注

東方学報 九六冊 十二月

藤野志織

関西日仏学館と女性たち―九条山時代(一九二七―三六)に

おける女子部の活動を中心に―

人文學報 一一七巻 五月

抄訳 シヤルル・グロボワ「中国におけるフランス語とアリ

アンス・フランセーズの役割(抄)」

人文學報 一一七巻 五月

アンドレ・ブルトンにおけるドキュメントの問い―「ありの

まま」の記述についての一考察

フランス語フランス文学研究 一一九巻 八月

藤原辰史

歴史の屑拾い12 非人間の歴史学(1)

群像四月号 七六巻四号 四月

チンプンカンブン大学育学部ゼミ 第一講 チンプンカンブ

ンの精神 クーヨン四月号 二六巻四号 四月

チンプンカンブン大学育学部ゼミ 第二講 育てるとは何か

クーヨン五月号 二六巻五号 四月

解説 スマートさと真逆の世界を描く「ザラザラ感の濃い

本」を読む

朝日新聞 四月三日

病人の治療だけが医者務めか チャパベック『白い病』の間

い コロナの時代の想像力

四月

いい人生は、いい社会から

phpスペシャル 二七四号 四月

書評 アネット・ヘス『レストラン「ドイツ亭」』

朝日新聞 四月十七日

藤原辰史先生の農の教室 危機の時代と有機農業

Metromin. locarhythm 一九巻四号 四月

時論フォーラム「人権問題と企業」調査・報告と検証を

毎日新聞 四月二二日

書評 ヨハン・ハリ『麻薬と人間 100年の物語 薬物への

認識を変える衝撃の事実』朝日新聞 四月二四日

災いはどこに濃縮されていくのか アジア太平洋資料センタ

ー編『コロナ危機と未来の選択』コモンスズ 四月

歴史の屑拾い13 非人間の歴史学(2)

群像五月号 七六巻五号 五月

表皮の脱領域的思考

文藝二〇二一年夏季号 六〇巻二号 五月

商品ではなく人間関係構築の食を

食べもの通信 六〇三号 五月

解説 SNSをやらない理由 言葉の発酵 時間必要

山陰中央新報 五月二日

チンブンカンブン大学教育学部ゼミ 第三講 強い目的と弱い

目的 クーヨン六月号 二六巻六号 五月

対談 藤原辰史・山縣良和「循環と分解から見るファッション」

Fashion Tech News 五月

解説「脱炭素」のまやかし 環境破壊の現実 目向け

北海道新聞 五月十三日

書評 ロブ・ダン『家は生態系』朝日新聞 五月十五日

解説「子どもの7人に1人は給食が命綱」という日本の貧

困 セーフティネットとして機能する「共同の食事の場」

WORKSIGHT 五月

時論フォーラム「沖縄・戦没者遺骨への冒とく」倫理総崩れ

に歯止めを 毎日新聞 五月二七日 五月

対談 伊藤亜紗×藤原辰史「ふれる、もれる」社会をどう

つくる? 二〇二一年春/夏号 ちゃぶ台⑦ 特集・ふれ

る、もれる、すくわれる

ふれあい再考 二〇二一年春/夏号 ちゃぶ台⑦ 特集・ふ

れる、もれる、すくわれる

日々のごはん 今、ゆるくないのはなぜ?

母の友 六月号 八一七号 六月

土壇場の環境思想—生産から分解へ

express 一〇巻六号 六月

歴史の屑拾い14 事件の背景(1)

群像六月号 七六巻六号 六月

書評 岩井克人・生源寺真一・溝端左登史・内田由紀子・小

島大造「資本主義と倫理…分断社会をこえて」

チンブンカンブン大学 農業経済研究 九三巻一号 六月

第四講 食堂付属大学

クーヨン七月号 二六巻七号 六月

書評 星野智幸『植物志』朝日新聞 六月五日

対談 藤原辰史×森田真生「危機」の時代の新しい地図

新潮二〇二一年七月号 一〇八卷七号 六月
解説 コロナ禍が浮き彫りにした課題

宮城保険医新聞 六月十五日

対談 藤原辰史×古村伸宏 コロナ禍と労協法制定から未来
社会とその研究の展望を探る／実践と研究、そして分野を
越境して／ 協同の発見 三四三号 六月

「子ども」から読む現代史 連載第一回 子どもから現代史
を考える構え はらっぱ 三九七号 六月

解説 それは何か信じられないことが起こる前触れ 集英社
新書編集部編『「自由」の危機―息苦しさの正体―』

集英社 六月

新・植物考 第五回 種について(2)

生きのびるブックス 六月

時論フォーラム「北陸新幹線延長」環境への負荷大、撤退を

毎日新聞 六月二四日

歴史の屑拾い15 事件の背景(2)

群像七月号 七六卷七号 七月

遊びの名手『虚無思想研究』20終刊号《辻潤全集未収録作
品／辻潤関係資料の発掘・収録＋創造的虚無思想へのオマ
ージュ》 七月

チンパンカンパン大学育学部ゼミ 第五講 厳しさについて

クーヨン八月号 二六卷八号 七月

書評 川満彰『沖縄戦の子どもたち』朝日新聞 七月三日

インタビュー 日本の農業は守れるか(上)

週刊金曜日 一三三六号 七月

補欠の眼力 アマチュア精神失っていないか

山陰中央新報 七月十一日

インタビュー 誰かと囲む食の可能性

毎日新聞(夕刊) 七月十二日

インタビュー 日本の農業は守れるか(下)

週刊金曜日 一三三七号 七月

対談 藤原辰史×佐藤優 生き方さがしの道しるべ

FILT二〇二一年八・九月号 一一二号 七月

時論フォーラム「東京五輪」虚飾の国の内実さらす

毎日新聞 七月二二日

2021年上半年 読書アンケート

図書新聞 三五〇五号 七月

書評 伊藤絵理子『清六の戦争 ある従軍記者の軌跡』

朝日新聞 七月三一日

インタビュー 〈対話編〉寄せ場と「縁食」。(一七)

潮八月号 七五〇号 八月

子どもの商品化に抗する思想

教育 九〇七号 八月

対談 篠原聡子×藤原辰史 ゆるやかな集まりのルール―食
を通して考える、関係性のありかた

新建築二〇二一年八月号 九六卷一〇号 八月

歴史の屑拾い16 歴史と文学(1) 群像八月号 八月

チンパンカンパン大学育学部ゼミ 第六講 公害について

クーヨン九月号 二六卷九号 八月

インタビュー 食と農の問題 若者にしわ寄せ

日本農業新聞 八月十三日

〔書評〕横山智『納豆の食文化誌』 朝日新聞 八月十四日
食事行為の緊張と緩和 緑食空間のケアについて

臨床心理学 増刊一三三号 八月

時論フォーラム「タリバンのアフガン制圧」大国の「物語」
に乗るな 毎日新聞 八月二十六日

集英社新書 九月

●ポストコロナの生命哲学（共著）

対談 藤原辰史×中原一步〈対話編〉寄せ場と「縁食」。

潮九月号 七五一号 九月

インタビュアー やさしき、つて？

BRUTUS 二〇二一年九月一日号 九月

歴史の屑拾い17 歴史と文学（2） 群像九月号 九月

チンパンカンパン大学教育学部ゼミ 第七講 本を読むこと

クイーン十月号 二六卷一〇号 九月

書評 リチャード・J・エヴァンズ『エリック・ホブズボーム

歴史の中の人生（上・下）』 朝日新聞 九月四日

インタビュアー 食べることを考えれば考えるほど、社会が見

えてくる。 本の花束二〇二一年九月 九月

新・植物考 第六回（最終回）「植物を考える」とはどうい

うことか 生きのびるブックス 九月

鼎談 藤原辰史×伊藤亜紗×福岡伸一 コロナを「ウイルス

との戦争」と見る事への違和感

東洋経済オンライン 九月十七日

書評 板垣竜太『北に渡った言語学者』

朝日新聞 九月十八日

「子ども」から読む現代史 連載第二回 独断と偏見

はらっぱ 三九八号 九月

時論フォーラム「政府の「大学改革」学問の不自由に拍
車？」 毎日新聞 九月二三日

対談 藤原辰史×永田希 「ブラックボックス」をめぐる対
話 第2回 世界を「分解」することへの欲望

集英社新書プラス 九月二七日

歴史の屑拾い18 歴史と文学（3） 群像十月号 十月

チンパンカンパン大学教育学部ゼミ 第八講 故郷について

クイーン十一月号 二六卷一一号 十月

書評 マリオン・ヴァン・ランテルゲム『アングラ・メルケ

ル 東ドイツの物理学者がヨーロッパの母になるまで』

朝日新聞 十月九日

農業も、戦争も、科学技術（テクノロジ）でビッグになっ

た 関根佳恵『家族農業が世界を変える1 貧困・飢餓を

なくす』 かもがわ出版 十月

書評 稲葉剛『貧困パンデミック』 朝日新聞 十月二三日

時論フォーラム「食料自給率」政治の根幹に注目を

毎日新聞 十月二八日

書評 アントニオ・スクラレーティ『小説ムッソリーニ 世紀

の落とし子（上・下）』 朝日新聞 十月三十日

死ぬから咲く、いのち 里見喜久夫編『障害をしゃべろう

下巻』 青土社 十月

「食べる」と「信じる」と「アレ」 vol.10 十一月

「捨てられたもの」目線の人文学

學士會会報 九五一号 十一月

複眼時評 苦手な理由 京都大学新聞 十一月一日

歴史の屑拾い19 歴史と文学(4)

群像十一月号 七六卷一一号 十一月

チンブンカンポン大学教育学部ゼミ 第九講 保育園と大学

クーヨン十二月号 二六卷一二号 十一月

チンブンカンポンな贈りもの

クーヨン十二月号 二六卷一二号 十一月

家族の枠組みを超えた食のあり方を考える 田中ひかる編

『アナキズムを読む 〈自由〉を生きたるためのブックガイ

ド』 皓星社 十一月

「藤原辰史×伊原康隆 学ぶとは何か―数学と歴史学の対話」

第一回 今でも根っこは理系かもしれない

みんなのミシマガジン 二〇二一年十一月八日 十一月

書評 岩間一弘『中国料理の世界史 美食のナショナルリズム

をこえて』 朝日新聞 十一月十三日

過去のパンデミックからの考察―スペイン風邪を考える 別

冊・医学のあゆみ 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)

― 共生への道 二〇二一年十一月二十日 十一月

マルコ・ファインゴルトの飢餓体験について 映画「ユダヤ

人の私」パンフレット 二〇二一年十一月二十日 十一月

時論フォーラム「地球環境破壊への対応」小手先思考から脱

却を 毎日新聞 十一月二十五日

対談 青木真兵×藤原辰史 「スマート」と闘う 青木真兵

編『手づくりのアジール 「土着の知」が生まれるところ』

書評 松村圭一郎『くらしのアナキズム』

晶文社 十一月

朝日新聞 十一月二十七日

解説 健常者中心主義 「ままならなさ」誰にも

山陰中央新報 十一月二十八日

論考 民間人について

ちゃぶ台⑧ 十一月

〈コロナ下の羅針盤〉3 負の歴史から学ぶ

農の美学 第2回 不可視の美 北海道新聞 十一月三十日

農業と経済 八七卷六号 十一月

歴史の屑拾い最終回 偶発を待ち受ける

群像十二月号 七六卷一二号 十二月

対談 藤原辰史×池内了 戦争を克服する

THE BIG ISSUE 四二〇号 十二月

パンデミックが歴史学の課題であるとはどういうことか

学術の動向 二六卷一二号 十二月

チンブンカンポン大学教育学部ゼミ 第十講 語んじること

クーヨン一月号 二七卷一號 十二月

「藤原辰史×伊原康隆 学ぶとは何か―数学と歴史学の対話」

第3回 孤学と縁学 藤原辰史

みんなのミシマガジン 二〇二一年十二月八日 十二月

台湾の政治学者 呉叡人さんの問いかけにどう応えるかも

しも日本が「小さな島じま」の一つとしてやりなおせるな

ら 週刊金曜日 一三五七号 十二月

書評 中野智世・木畑和子・梅原秀元・紀愛子『価値を否定

された人々 ナチスドイツの強制断種と「安楽死」

朝日新聞 十二月十一日

微生物たちを動かす「呪文」を発見しよう 関根佳恵著「家族農業が世界を変える2 環境・エネルギー問題を解決する」

かもがわ出版 十二月

書評 マリオ・バルガス・リョサ「ケルト人の夢」

朝日新聞 十二月十八日

コロナ・パンデミックの中で農業を考える 西谷文和編「公の罪 維新の毒」

日本機関紙出版センター 十二月

解説 欲望共有する社会へ 中日新聞 十二月二十日

「子ども」から読む現代史 連載第三回 歴史学の方法としての変身 はらつば コロナ下、「戦争」を考える

三九九号 十二月

時論フォーラム「オミクロン水際対策」外国人に硬直的

毎日新聞 十二月二三日

藤原辰史 書評委員の「今年の3点」

朝日新聞 十二月二五日

北海道ばあちゃん 明日の友2022年冬号 二七一年 一月

かがり火 パンデミックを生きた者の責務 月刊社会教育 六六巻一号 一月

二〇二二年の計 いつでも元氣 三六二号 一月

インタビュー「待つ楽しみ」教えてくれる

山陰中央新報 一月一日

公衆浴場と公衆食堂 あすの畑 二〇二二年一月号 一月

チンパンカンパン大学教育学部ゼミ 第十一講 お惣菜の研究

クーヨン二月号 二七巻二号 一月
インタビュー 種と土とひとの持続可能な未来って？
いいね Vol.59 種と土あつての食卓 一月

解説 年始評論 肥大した自画像を捨てる 自浄に向けて列島の換気を

山陰中央新報 一月五日（共同通信配信）

対談（新春鼎談）藤原辰史×槌田劬×魚住道郎 いまこそ

求められる有機農業の思想

土と健康 二〇二二年1・2合併号 五〇巻一号 一月

書評 毎日新聞取材班「ヤングケアラー」

朝日新聞 一月八日

「藤原辰史×伊原康隆 学ぶとは何か―数学と歴史学の対話」

第5回 本物とは何か みんなのミシマガジン 一月

書評 カトリック・マルサル『アダムの夕食を作ったのは誰か？ これからの経済と女性の話』

朝日新聞 一月十五日

時論フォーラム「NHK字幕問題」卑しさのあらわれ

毎日新聞 一月二七日

解説 各自核論 無縁希望社会 日本近代問い直す時期

北海道新聞 一月二七日

書評 久野愛「視覚化する味覚」 人工着色料から考える

朝日新聞 一月二九日

解説 羅針盤 旧大社基地 歴史検証し、世界に発信を

山陰中央新報 一月三十日

慢性と急性―人文的省察

みんなのねがい二〇二二年二月 六七三号 二月

対談 討議 藤原辰史×阿古真理 ケアの家政学

現代思想二〇二二年二月号 五〇巻二号 二月

対談 クロスオーバー談義 藤原辰史×金満里 「食べて出す、
間を耕し世界をつなげる」 IMAJU 三五八五巻 二月

「藤原辰史×伊原康隆 学ぶとは何か―数学と歴史学の対話」
第7回 歴史学習における「したい」と「しなければなら
ない」 みんなのミシマガジン 二月

書評 小野容照『韓国「建国」の起源を探る 三・一独立運
動とナシヨナリズムの変遷』 朝日新聞 二月十二日
時論フォーラム「緊迫のウクライナ情勢」総合的な視点、報
道を

●高校生と考える新時代の争点21（共著） 左右社 三月

書評 林博史『帝国主義国の軍隊と性 売春規制と軍用性的
施設』 朝日新聞 三月五日

「藤原辰史×伊原康隆 学ぶとは何か―数学と歴史学の対話」
第9回 ウクライナ侵攻について みんなのミシマガジン 三月

チンペンカンペン大学育学部ゼミ 第十二講 歴史を学ぶ
クイオン三月号 二七巻三号 三月

書評 松尾貴史『違和感ワンダーランド』 朝日新聞 三月二六日

チンペンカンペン大学育学部ゼミ 第十三講 図書館のあそ
び方 クイオン四月号 二七巻三号 三月

時論フォーラム「露のウクライナ侵攻」背景学び続けよ
毎日新聞 三月二四日

「子ども」から読む現代史 連載第四回 犠牲について

はらっぱ 四〇〇号 三月

船山 徹

『六度集経』の外側…語彙と併行句 六度集経研究会『全訳
六度集経…仏の前世物語』 法蔵館 六月

解説 森三樹三郎『梁の武帝…仏教王朝の悲劇』

未詳撰者『慈悲道場懺法』十巻の資料価値
法蔵館文庫 法蔵館 九月

漢訳仏典…東アジア仏教の始まり 東方學報 京都九六 十二月
同朋 二〇二二年一月号 十二月

●科研費成果報告書『仏教漢語 語義解釈…漢字で深める仏教
理解』（単著） 三月

中国における『梵網経』と日本への影響…日本の重文写本
『梵網経』二種 公益財団法人仏教美術研究上野記念財団
研究報告書四八「日本における梵網経と菩薩戒思想の間
題」 三月

古松 崇志

徐夢華『三朝北盟会編』と文献会説 人文 六八号 六月

●草原的稱覇（岩波新書中國の歴史三） 聯經出版公司 十一月

●金（女真）と宋―12世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外
交（京大人文研漢籍セミナー九）（共著）

研文出版 十二月

契丹(遼)の王権儀礼と信仰

メトロポリタン史学 一七号 十二月

宮 紀子

「知」の混一と出版事業 櫻井智美・飯山知保・森田憲司・

渡辺健哉編『アジア遊学二五六 元朝の歴史——モンゴル

帝国期の東ユーラシア』 勉誠出版 五月

モンゴル時代史鶏肋抄(一) クビライのマスク 七月

モンゴル時代史鶏肋抄(二) 権威もつはんこ(上) 七月

モンゴル時代史鶏肋抄(三) 権威もつはんこ(下) 八月

モンゴル時代史鶏肋抄(四) ユーラシアの東西で読まれた法

令書 究 一二七 十月

モンゴル時代史鶏肋抄(五) モンゴルの文字の来し方・行く

末 究 一二八 十一月

モンゴル時代史鶏肋抄(六) ユーラシアの東西で読まれた医

学書 究 一二九 十二月

●呼斯楽(訳)『元代的出版文化』

社会科学文献出版社 十二月

モンゴル時代史鶏肋抄(七) ユーラシアの東西で鑑賞された

道釈画 究 一三〇 一月

モンゴル時代史鶏肋抄(八) バヤンの肖像

究 一三〇 一月

究 一三一 二月

モンゴル時代史鶏肋抄(九) 一兵卒が語る東南アジア遠征

究 一三二 三月

宮宅 潔

「秦代出土文字史料の研究」班の二〇二〇年 人文 六八 六月

「中華帝國」的誕生 南川高志編『歴史的轉換期01 前二二

〇年 帝國與世界史的誕生』 臺灣商務印書館 七月

●ある地方官吏の生涯 木簡が語る中国古代人の日常生活

臨川書店 七月

從征服走向占領統治・里耶秦簡所見糧食支給与駐屯軍

張忠 煒編『里耶秦簡研究論文選集』 中西書局 八月

軍事制度からみた帝國的誕生・秦から漢へ 『岩波講座世界

歴史 05 中華世界の盛衰(四世紀)』 岩波書店 十一月

釋秦代的「徭」与「戍」 簡牘学研究 一一 十二月

岳麓書院所藏簡《秦律令(壹)》訳注稿 その(四)(共訳)

東方学報京都 九六冊 十二月

●論点・東洋史学(共編) ミネルヴァ書房 一月

秦の始皇帝—ファースト・エンペラーの素顔に迫れるか—

『論点・東洋史学』 ミネルヴァ書房 一月

『漢簡語彙考證』訂補(一)—遣自致、封符、物故

簡帛網二〇二二年一月二八日

The Withdrawal of the Qin Army from Qianling Prefec-

ture: From the End of Conquest to the Beginning of

Occupation *Bamboo and Silk* 5-1 三月

山川出版社 一月

書評 水間大輔 「漢律令」 「大不敬」 考・「漢律令」 「不敬」 考
法制史研究 七一 三月

もういちど読む山川世界史 PLUS ヨーロッパ・アメリカ
編(共著) 山川出版社 一月

向井 佑介

書評 佐藤淳平 「近代中国財政史——「外省」から「地方」
へ」
法制史研究 七一号 三月

●翻訳 楊鴻勳著 『唐長安 大明宮』 (監訳・共訳) 上下巻

科学出版社東京・ゆまに書房 五月

守岡 知彦

三世紀東アジアの文物をさぐる 人文 六八号 六月
北魏考古資料と鮮卑の漢化—5世紀の都城と墓制變容
國立扶餘博物館編・発行 『百濟と北魏Ⅱ』 十月

説文小篆に対する漢字構造記述の試み 東洋学へのコンピュ
ータ利用 第34回研究セミナー 七月
Machine-readable description of Chinese Charac-
ters — Overview and background of CHISE —

村上 衛

KUDH International Conference 十月

商人集団・ギルド／アヘン戦争 社会経済史学会編 『社会経
済史学辞典』 丸善出版 六月

圏論に基づく漢字構造記述のモデル化の試み
情処研報 2022-CH-128巻 一二号 二月

書評 蒲豊彦 『闘う村落——近代中国華南の民衆と国家』
歴史学研究 一〇一六号 十一月

森本 淳生

「士大夫」から華人へ—清代後期同安県の寺廟に対する寄付
事例より 東方学報 九六冊 十二月

座談会 立木康介他 「狂い咲く、フーコー 京都大学人文科
学研究所 人文研アカデミー「フーコー研究」出版記念シ
ンポジウム全記録+(プラス)」 読書人新書 八月

アヘン戦争 吉澤誠一郎監修 『論点・東洋史学』
ミネルヴァ書房 十二月

父の権威とマイナー作家性—レチフ・ド・ラ・ブルトンスに
おけるエクリチュールの主体をめぐって 文芸事象の歴史
研究会(野呂康他) 編 『GRILL II 文学に働く力、文学
が発する力』 吉田書店 十一月

「鎖国」と「海禁」 平井健介・島西智輝・岸田真編 『ハンド
ブック日本経済史——徳川期から安定成長期まで』
ミネルヴァ書房 十二月

Introduction. Du "Non-humain" au "Post-humain". MORIM-
OTO Atsuo (ed.) Dossier spécial II: Les Humanités

望廈・黄埔条約と無条約国 山川歴史PRESS 五 十二月

OTO Atsuo (ed.) Dossier spécial II: Les Humanités

もういちど読む山川世界史 PLUS マジック編(共著)

Introduction. Du "Non-humain" au "Post-humain". MORIM-
OTO Atsuo (ed.) Dossier spécial II: Les Humanités

※ post-humaines 》

Zinbun 52 三月

翻訳 ジャン・モレアス「アニエス」〔情熱の巡礼者〕所収）―翻訳と註解の試み（鳥山定嗣と共訳） 日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」 <https://www.paul-valery-japon.com/blog> 三月

知と欲望―バルザック『絶対の探求』を読むフーコー 日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」 <https://www.paul-valery-japon.com/blog> 三月

矢木 毅

口伝と下批：朝鮮時代における王命出納の手続き

東方学報 九六冊 十二月

安岡 孝一

世界の Universal Dependencies と係り受け解析ツール群

第三回 Universal Dependencies 公開研究会 六月二二日

アイヌ語 Universal Dependencies 再考 東洋学へのコンピュータ利用

第三四回研究セミナー 七月三十日

Universal Dependencies によるアイヌ語テキストコーパス

情報処理学会研究報告 Vol. 2021-CH-127 『人文科学とコンピュータ』

八月二八日

Transformers を用いた古典中国語（漢文）文切りモデルの

製作 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこ

〜2021」論文集 十二月十一日

古典中国語（漢文） Universal Dependencies とその応用

情報処理学会論文誌 第六三巻第二号 二月十五日

Transformers と国語研長単位による日本語係り受け解析モデルの製作 情報処理学会研究報告 Vol. 2022-CH-128

『人文科学とコンピュータ』 二月十九日

Universal Dependencies と BERT/ROBERTa モデルによる多言語情報処理 京都大学人文科学研究所・未踏科学研究ユニット・データサイエンスで切り拓く総合地域研究ユニット 二月二八日

楊 維公

詩で讀む傳奇―和刻本『蒲東崔張珠玉詩集』と江戸時代における西廂故事の傳わり方の可能性―

中国文學報 九四冊 四月

生活・讀書・新知三聯書店 一月

◎翻訳 興膳宏『杜甫：超越憂愁的詩人』

中国文學報 九四冊 四月

人

文

第六九号 二〇二二年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品